
ある母子の恋愛模様

クラッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある母子の恋愛模様

【Nコード】

N0687P

【作者名】

クラッキー

【あらすじ】

甥の健太を引き取り、育てている坂下美希。実の息子同然に健太を育ててきたが、彼が思春期に差し掛かり、美希は自分の限界を感じ始めていた。

一方、健太も美希を実の母親同然に思っていたが、彼女の中にチラつく男の影に、不安を覚え始める。

母親（仮）に対する複雑な感情に揺れ動く少年と、息子（仮）に対する複雑な感情に揺れ動く三十路女。

ある出来事をきっかけに、回り始めた歯車に巻き込まれていく二人。

注（母親と息子が愛し合っている話ではありません。

全ての始まり ～side美希～（前書き）

美希の目線と健太の目線を交互に書いていきます。

まずは、美希目線のプロローグからです。

全ての始まり ～side美希～

ヤバイ、倒れそう…。

その日、通勤電車に乗っていた私は、自分の体調不良を自覚していた。

朝、起きた時から体が重く、立ち上がるとふらついていてた。

体温計は、若干の微熱があること示す。

これくらいで、仕事を休む訳にはいかない。

元々、貧血気味の私は、満員電車に揺られ、気分が悪くなることがある。

初めは、いつものことだと思い、気にしないようにしていた。

ところが、降車駅まであと少しという所に差し掛かった時、どうにも立っていることが辛くなってきた。

隣の学生風の男の子は、私の様子に気付き、心配そうな顔をしている。

その彼は、中々整った顔立ちをしている…、と思った所までは記憶している。

降車駅のホームに降りた私は、恐らくそのまま倒れ込んでしまった。

「…お姉さん、大丈夫…？」

遠くでそんな声が聞こえている気がした…。

全ての始まり　↳side健太（前書き）

美希の目線と健太の目線を交互に書いていきます。

今回は、健太目線のプロローグです。

全ての始まり　↳side健太

学校に向かう俺は、胸騒ぎがして仕方なかった。

「体調悪いんだったら、仕事休めよ。」

「これくらいで、仕事休むわけにはいかないの。」

体温計は六度九分を指していた。

うーん、微妙な体温だ…。

「無理するなよ。」

「大丈夫だって！じゃあ、私は先に行くよ。」

「行ってらっしゃい。」

本当に大丈夫かよ…。

「ねえ健ちゃん、聞いてた？私の話。」

隣を歩く、竹内友美に声を掛けられ、別の事を考えていた俺は我に返る。

「あつ、ごめん。何？」

「もー！」

膨れっ面の彼女を見て、しまったと思った。

彼女は俺の幼なじみ。

家はすぐ近所で、小学校から高校までずっと一緒。

俺は彼女のが好きだ。

向こうはどう思っているか知らない。

確かめるのは怖い…。

「なあ、友美。俺って…、マザコンなのかな？」

「何を今さら…。健ちゃん間違いないくマザコン…！」

「やっぱり…。」

好きな女の子に、『マザコン』と断言され、さすがにショックを受ける。

「でも…、健ちゃんの場合は仕方ない気もするし…。気持ち悪い感じのマザコンじゃないから、別にそれでいいと思うよ。」
「妙な慰め方をされた俺は、また別の事を考え始めた。」

「坂下健太はいるか？」

授業中、担任の先生がクラスに飛び込んで来た。

「…？はい…。」

先生の様子から、ただ事じゃないことを悟る。

俺、何かしたっけ？

そう思いながら廊下に出る。

「お母さんが倒れたらしい。今から、病院に行くぞ！俺が車で送る。」

「…、えっ？」

一瞬、何の事がよく分からなかった。

それから病院までの事は、よく覚えていない。

ふざけんなよ！

あれほど無理すんなって言っただろ！

頼む、どうか無事でいてくれよ！

そんな事を繰り返して考えていた。

私と健太 〈side美希〉

気が付くと、そこは病院のベッドの上だった。

既に、太陽は西に傾き始めていた。

「…。」

自分の置かれている状況を理解するのに、少し時間がかかる。

ベッドの横を見ると、制服姿の少年が本を読んでいる。

「あつ、健太？」

「おつ、気が付いたか？急に倒れるんじゃないよ、びっくりするだろ！」

この少年は私の息子。

今年、高校生になったばかり。

「私、倒れたの？」

「ああ、過労だったよ。無理すんなって言ったたる！」

「しゅめん…。」

「気が付いたなら、先生呼んで来る。」

病室を出て行く健太の背中を、ぼんやり見ている私。

私は、まだ三十歳を超えたばかりだが、高校生になる息子がいる。

私が十代で生んだ息子…、ではない。

彼の本当の親は、私の兄夫婦だ。

私達兄妹の両親は、私が中校生の時、相次いで亡くなった。

私達兄妹には、他に身寄りがない。

私は高校には行かず、働こうとした。

「心配するな。高校ぐらい俺が行かせてやる。大学だって行かせてやる。お前は、俺と違って頭がいいんだから。お前の面倒を見るくらい、わけないよ。」

少し歳が離れており、既に働き始めていた兄は、半ば強引に私を高校に行かせる。

大学には行くつもりはなく、手に職をつけるつもりだった。

元々、髪をいじるのが好きだった私は、美容師に興味があった。

ある時、高校の担任にそのことをポロリと漏らしてしまう。

すると、兄はどこからか聞きつけ、美容師の専門学校のパンフレットを私に見せてきた。

これ以上、兄に迷惑を掛けるわけにはいかないと思ったが…。

結局、専門学校へ行った私は、卒業後、今の美容室に勤め始めた。

ここまでなんとか辿り着き、私は実家を出て自立を考え始めた矢先、兄夫婦は呆気なくいなくなってしまう…。

兄は、両親が亡くなった後、すぐに結婚した。

義姉は優しい人で、実の姉が出来たみたいで嬉しかった。

私が高校一年の時、兄夫婦に子供が生まれる。

それが、健太だ。

彼等は、自分達の子供の他に私も抱え、生活は決して楽なはずはなかったが…。

そして…、健太が小学生になる直前、兄夫婦は、交通事故で呆気なく亡くなってしまった。

一緒に車に乗っていた健太だけは、一命を取り留める。

軽い後遺症は残ったが、命に別状はなかった。

少し左腕が不自由なだけの、軽い後遺症。

健太を施設に預けるといふ選択肢もあったが、私はそうしなかった。

『自分の手で立派に育ててみせる』、という変なプライドがそうさせた。

それが、専門学校まで行かせて貰った兄に対する、恩返しだと思っただから。

しかし、二十歳そこそこの小娘が、小学生の子供を一人で育てることが出来るほど、世間は甘くないということは、すぐに思い知らされる。

幸い、両親が残してくれた家があったから、住む所には困らなかった。

しかし、私の給料では食べていくのがやっとの状態。

一番の問題は、健太に関する事。

彼は、一度も私に言ったことはないが、家庭の事情の事で色々辛い思いもしているはず。

私に対する風当たりなら大した問題ではないが、健太に関する事

には心を痛めた。

健太は私のことを、『美希さん』と呼ぶ。

戸籍上の母親は私になっているが、実母は他にいるのだから、当たり前と言えば当たり前。

思春期真っ只中の現在は、『美希さん』と呼んでくれることすら稀で、『オイ』とか『アンタ』で済まされることも多い。

私自身も、『お母さん』と呼ばれたい訳ではないので、特に気にはならない。

せめて名前では呼んで欲しいが…。

そんな健太だが、周囲には私のことを自分の親だと話しているようだ。

まだ小学生だった頃、彼の友達が遊びに来た時、

「健太君のお母さん。」

とその友達に呼ばれた事がある。

「えっ？ああ、私か。」

すぐに自分のことだと、認識出来なかった。

「今日、お母さんって呼ばれちゃった！」

嬉しそうに健太に話す私。

「何を当たり前のことで喜んでるんだよ！気持ち悪いなあ…。」

照れ臭さを隠し、ぶっきらぼうに答える彼を、単純に可愛いと思っ
た。

自分のお腹を痛めた子供じゃなくても、母性は目醒めるものらしい。

つい最近、二人で近所のスーパーで買い物していた時にも、

「あら、姉弟で買い物ですか？仲が良いのね。」

見知らぬおばさんに、声を掛けられた。

「姉弟だって！私もまだまだイケるね。」

「母親のくせに気持ち悪いこと言うなよ…。」

冷たく返す健太だったが…。

その言葉が、私を更に喜ばせたことに、彼は気付いていない。

健太を引き取ってから、既に十年になるが、その間、自分を顧みる
余裕は全くなかった。

職業上、外見にはある程度、気を使ってはいたが、同世代の女性のように、恋を探し彷徨ったり、恋人と遊んだり、ましてや結婚する余裕など全くなかった。

自分の境遇に涙する時間すら…。

気が付けば三十歳を過ぎ、私はもう結婚する事はないだろうと思っている。

言い寄ってくる男がいなくてもないが、私の複雑な事情を知ると、大概の男は離れていってしまふ。

「美希さんは結婚しないのか？」

ある日、健太が聞いてきた。

「この歳じゃ、もう無理じゃないかなあ。それに、私は結婚願望があるわけじゃないし。」

「…俺の…、所為じゃないのか…？」

やっぱり、健太はそれを気にしていたのか…。

「健太は関係ない。私だって結婚したくなればするし。でも、相手を見つける事から始めないといけないけどね。」

彼に余計な心配を掛けたくない私は、少し嘘をついた。

「別に結婚出来ないなら、それでいいんじゃないかねえの。あと三年もすれば俺も働き始めるし、美希さん一人ぐらい、面倒見るのなんてわ

けないよ。」

その言葉に、涙が出そうになった。

兄が私に言った事と、同じ事を健太も言ったから…。

「あんたは世間を甘く見てる。大学には行ったほうがいいよ。その方が、後々差が出てくるんだから。健太は頭がいいんだから勿体ないでしょ？」

気が付けば、私も兄に言われた事と、同じ事を言っていた。

「うーん…、もう少し考えてみるけど…。」

「お金は心配する必要ないからね。私も貯蓄ぐらいあるし、おじいちゃんとおばあちゃんも、出してくれるって言ってるから。」

『おじいちゃん』、『おばあちゃん』とは、私の祖父母ではない。

健太の祖父母、つまり義姉の父母のこと。

世間知らずの小娘が、ここまで彼を育てる事が出来たのは、この祖父母のおかげ。

少し離れた所に住んでいるが、時々、健太を連れて顔を見せに行く。

健太にとっては血の繋がりのある肉親だが、私は、はっきり言って赤の他人だ。

そんな私達親子を、何かと助けてくれる。

「うちで健太の面倒を見てもいいんだよ。勿論、美希ちゃんも一緒に。」

「大丈夫です。まだ頑張れますから。」

この人達の前で、私はいつも強がってみせる。

彼等の中に、赤の他人である私が入り込む訳にはいかない、という意地みたいなものだ。

そんな私の心を知ってか知らずか、

「お金ならいつでも出すから遠慮なく言ってね。」

「はい…。」

先立つものは…、こればかりは仕方ない。

健太を私が引き取るようになった時、彼等は最後まで自分達が引き取ると言って引かなかった。

最後は健太が、

「この家を離れたくない。」

と言ったことで決着がついた。

その代わりに、金銭面は祖父母である彼等が援助する、という条件付きで。

健太の高校進学費用も出して貰った。

全部、自分でなんとかした兄みたいに、私はなれなかった…。

「今日は入院してもらおう事になるけど、明日、検査結果が問題なければ、退院してもらって結構です。それから、二、三日は自宅で安静にして下さい。」

「分かりました。ありがとうございます。」

医師の診断結果を聞いてホッとしたが…、余計な出費が…。

「そういえば、美希さんが寝てる時、美容室の店長が来たよ。」

一旦、家に戻る健太が、帰り際に言った。

「何か言ってた？」

「何かめっちゃめっちゃ恐縮してたよ。『働かせ過ぎて申し訳ない』って。一週間は休めてよ。」

「そんなに休みいらぬのに。…あんだ…、また余計な事を言つてないでしょうね？」

「『また』ってなんだよ！何も言つてねえよ。」

「ならいいけど…。」

「じゃあ、着替え取ってくるから。」

「気を付けてね。」

「ちゃんと寝てろよ。」

あの小さかった健太が、よくぞここまで大きくなったものだ。

健太の後ろ姿は、私の兄にそっくりだった。

俺と美希さん　side健太

「ちょっとした過労ですね。少し体が弱っているところに、風邪の菌が入っただけだと思います。」

「…良かった。」

医師の診断を聞き、ホッと胸を撫で下ろす。

「詳しい事は、検査結果が出ないと分からないですが、恐らく大丈夫でしょう。今日一日様子を見て、問題なければ、二、三日の自宅療養でいいでしょう。」

「ありがとうございます。」

そう言って廊下に出た俺。

「どうだった？」

俺が出て来るのを待っていた、担任の先生が尋ねてくる。

「取り敢えずは大丈夫みたいです。」

「今日は、学校は早退でいいから側にいてやれ。明日も休んでいいから、明後日から出られるようなら学校に来い。」

「分かりました。」

先生も大袈裟なんだよ…。

一応、うちの家庭事情を知ってる先生が、妙に気を使っているのが少し鬱陶しかった。

もしかして、美希さんに惚れてたりして…。

アイツ、歳の割には若く見えるからなあ。

美希さんがいる病室に入り、安らかな寝顔を見た俺は、本を読みながら彼女が起きるのを待っていた。

お昼過ぎ、突然、病室がノックされる。

「失礼します。こちらに、坂下美希さんが入院されていると伺ったんですが。」

四十歳ぐらいの男の人が入って来た。

「どちら様ですか？」

その男性は、俺の顔をまじまじと見てくる。

「…？もしかして…、健太君かな？わたくし、美希さんが勤めてる美容室の店長をしている木村と言います。」

「ああ、どうもお世話になってます。」

「俺、君がまだ小さかった頃、会った事あるんだけど、覚えてない

かなあ。大きくなったね。」

「はあ…。」

「あつ、そんな事より、容態は？」

「過労だそうです。あまり心配はないみたいですが。」

「申し訳ない！そんなに働かせてるつもりはなかったんだけど、無理させちゃってたみたいで！」

四十歳ぐらいの男の人が、高校生の俺に頭を下げる姿は、少し可笑しかった。

「気にしないで下さい。自分の体調管理が出来ないこの人が悪いんです。三、四日で仕事に行けるみたいですから。」

「君がそう言ってくれと…。仕事の事は心配しないで、一週間は仕事を休むように伝えてよ。」

「分かりました。わざわざ来ていただいて、すみませんでした。」

「健太君はしっかりしてるなあ。美希ちゃんの教育が良かったんだな。」

大人に誉められて悪い気はしない。

「あの…、木村さんは独身ですか？」

「結婚してるけど…、何で？」

「いえ、別に…。」

調子に乗って、また余計なことを言ってしまった。

また美希さんに怒られるかなあ…。

美希さんは、俺の本当の母親ではない。

血縁上は、叔母にあたる。

色々、わけあって俺を引き取り、養子にしてくれた。

華奢な体型で、仕事の関係上、若作りをしている為、歳の割には若く見える。

友美が言うには、『すごい美人』らしい。

俺は、正直よく分からない。

「美希さん、いくつになっただんだけ？」

「三十歳ぐらい。」

「『ぐらい』って何だよ！」

「うるさい！女の人に歳を聞くもんじゃないの。」
歳を聞いても、いつもはぐらかされる。

俺の計算だと、三十二歳だけど…。

一度も結婚はしていない。

それは多分、俺の所為…。

美希さんは否定するが、思春期真っ只中の子供がいる、複雑な家庭事情の三十路女と、結婚したい男がそうそういるはずもない。

例え美人だとしても…。

「結婚出来ないなら別にいいんじゃないかねえの。俺が働き始めれば、美希さん一人、面倒見るくらいじゃないよ。」

俺は美希さんに、ここまで育てて貰った恩がある。

それは、絶対に返さなければいけないものだと思っている。

俺の意地みたいなものだ。

「あんたは、世間を甘く見てる。大学に行け。」

と美希さんは言う。

美希さんの大学に行けという理由も最もなので、今はまだ迷っている。

幸い、悩む時間はまだある。

俺には、実母の記憶がほとんどない。

一緒にいたのは、六年ぐらい。

その内、俺の記憶にあるのは、二年ぐらいしかない。

実母がいた頃も、美希さんとは一緒に暮らしていたから、どちらの記憶か、はっきりしないものも多い。

美希さんと二人になってから十年になるので、記憶が上書きされているものも多いはず。

今では、写真で見る顔しか思い出せないくらいだ。

「段々、私の味付けに近付いてきたねー。」

「当たり前だろ。俺は美希さんに料理を教わったんだから。それより、自分の味付けを本当に覚えてるのかよ。最近は全く料理なんかしてないのに。」

「健太が小学生までは、私がちゃんとご飯を作ってたでしょ。」

「五年生からは俺が作ってた。」

「つい最近のことだよ。」

小さい頃、火や包丁を扱えるようになったら、ご飯は俺が作ると決めていた。

その為に、小さい頃からよく、料理作りは手伝っていた。

俺にとって、『お袋の味』とは『美希さんの味』の事を言う。

他にも、家の事は出来るだけ俺がやるうとしていたら、気が付くと美希さんがやってるのは、洗濯ぐらいになった。

洗濯も俺がやっても構わないのだが、色々気を使っているのだろう。

一応、俺は思春期の男なのだから、難しい問題も出てくるわけだし。

美希さんの自意識過剰だと、思わないでもないが…。

友美にも断言されたが、俺はどうやら『マザコン』らしい。

『美希さんが好き』と言う、気持ち悪い事を思ってるわけではない。

ただ、俺にとって、一番大事な人であるだけ。

それに、実の母親ではない。

それなのに、『マザコン』だと言われるなら、しょうがないという気がする。

俺は美希さんの事を、一度も『お母さん』と呼んだ事はない。

しかし、俺を生んでくれた実母には悪いが、俺の母親は美希さんだ。それ以上でも、それ以下でもない。

だから、俺の事は気にせず、結婚して幸せになって欲しいと思っている。

反面、美希さんを他の人に取られたくないという気持ちも、確かに存在する。

思春期の少年の心は、色々複雑なのだ…。

「あつ、健太？」

目が覚めた美希さんが、俺に気付く。

「おつ、気が付いたか。急に倒れるんじゃないやねえよ、びっくりするだろ！」

「私、倒れたの？」

「ああ、過労だったよ。無理すんなって言ったたる！」

「ごめん…。」

「気が付いたなら、先生呼んでくる。」

病室を出た俺は、緊張の糸が切れ、危うく涙を流しそうになった。

大事に至らなくて、本当に良かった…。

医師から病状の説明を受けた美希さんを見届け、着替えを取りに行く為に、一旦、病院を出る。

携帯を確認すると、メールが一件入っていた。

友美からだった。

受信『話は先生から聞いたよ。美希さんはどんな様子？』

送信『さつき気が付いた。俺は今から一度、家に戻る。大事には至らなかったみたい。心配掛けて悪かったな。』

家の前に着くと、門の前で、友美が待っていた。

「何してるんだ？」

友美に声を掛ける。

「何って、心配だから待ってたんじゃない!」

友美の行動を見てると、俺の事が好きなんじゃないかねえの?と思う事がある。

「メールで言った通りだよ。今のところ、心配ないから。」

「そう、良かった…。何かあったら、遠慮なく言ってよ。今日の夕飯、私の家で食べる?作ってる暇ないでしょ?」

「うーん、まだどうなるか分からないからなあ。」

「遅くなってもいいから、帰る時、連絡してよ。」

「分かった。」

「じゃあね、バイバイ!」

「ああ…。」

制服姿の友美の背中を見送り、自分の家に入る。

やっぱり、アイツは俺の事が好きかも…。少なくとも、悪くは思っ
てないはずだ。

そんな妄想に近い事を考えながら…。

回り始めた歯車 〈side 美希〉

検査結果に異常はなく、私は翌日に退院した。

健太も学校を休み、私に付き添っていた。

「一人で大丈夫なのに。」

「先生が休んでいって言ったんだし、家にいても暇だから。」

いつもの調子で、ぶっきらぼうに答える健太だが、その姿はまるで娘の心配をする父親ようだった。

これじゃあ、どっちが親か分からない…。

退院した日の夕方、健太の幼なじみの友美ちゃんが家に来た。

友美ちゃんのお母さんが作ったという煮物を持って。

「気を使わせちゃって、悪いね。お母さんにも、宜しく言っといてね。」

この親子は、私と健太を何かと気に掛けてくれる。

「気にしないで下さい。うちの母は、他人の世話を焼くのが好きなだけですから。」

私達はつくづく恵まれていると思う。

最近は生意気になったが、複雑な家庭環境の健太が、グレずにここまでこれたのは、私達の周りの暖かい人達のおかげ。

健太の幼なじみの友美ちゃんは、しっかりしていて、小さい頃から健太のお姉さんみたい。

健太は、彼女の事が好きなのでは？と私は思っている。

友美ちゃんも多分…、でも、どうなんだろう…？

嫌いではないはずだが…。

私の事を、『健太君のお母さん』と言ったのも彼女。

「美希さん、体調はどうですか？」

『健太君のお母さん』と言った彼女に、私は『美希さん』と呼べと言った。

『お母さん』と呼ばれるのは気恥ずかしかったから。

「今は、少し体が重いぐらいかな。」

「日頃から、ちゃんと体調管理してれば、倒れることなんてないんだよ。」

「…。」

健太にお母さんみたいな説教をされ、私は返す言葉もない。

次の日は、友美ちゃんのお母さんである春子さんが来た。

簡単な用事なら、いつも娘の方が来るが、お母さんの方が来たということは…。

挨拶や世間話をした後、春子さんは本題に入ってきた。

「また今回みたいな事があるといけないから、美希ちゃんも、早くいい人見つけないといけないねえ。」

ほら、やっぱり…。

「健太がもう少し大きくなったら考えますよ。」

ここから、この人の話をかわすのは少し骨が折れる…。

「健太君も高校生になったんだから、充分大きいでしょ。実は美希ちゃんに紹介したい、いい人がいるんだけど…。」

「私も、そういう事を何も考えてないわけじゃないですから、自分でもう少し考えます…。」

何とか、この日も上手くかわせた…と思う。

私だって何も考えてない訳じゃない。

でも、自分一人で決められる問題でもない。

健太は一度も、『お父さんが欲しい』と言った事はない。

もしかして…、私が他の男に取られるのは、面白くないとか…。

それはさすがに、私の考え過ぎだろ…。

私は健太の実の母親じゃないんだから…。

いつもと同じ結論に達し、これ以上考えるのは止めた。

一週間、何もしてないと、さすがに飽きてくる。

私は、倒れた日からきっちり一週間で、仕事に復帰する事にした。

久しぶりに電車に乗るのは、少し怖かったが…。

駅のホームで、電車を待っていると、見知らぬ青年が軽く会釈をしてきた。

??? 私も会釈を返しながら…。

「あっ！」

思い出した！

あの日、私の隣にいて、私を助け起こしてくれた青年じゃないかな？

これは社会人として、お礼を言うべきだよね…？

「あの…。」

恐る恐る声を掛ける私。

「もう体は大丈夫なんですか？」

やっぱり、あの時の青年だ。

「おかげ様で…。あの時はご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした。それから…。ありがとうございます。」

「さすがに、ちょっとびっくりしましたよ。目の前で人が倒れるのは、初めて見ましたから。」

そう言った彼の笑顔に、ドキツとした。

「本当に申し訳ありませんでした。何とお礼を言ったらいいか…。」

「お礼なんて、とんでもない！」

中々感じのいい青年。

電車の中でも、彼と少し話をした。

彼の名前は有馬孝平。

美容師専門学校に通っている。

私が行っていた所と同じ。

二十歳、私と一回り違う…。

「坂下さんは…、結婚してるんですか…?」

少し、言い淀んだ彼。

「えっと…、してないけど…?」

子供がいます…。

しかも、三十歳を超えています…。

「良かった…。」

「えっ!」

何が『良かった』なの?

「この前のお礼の代わり…、とってはなんですが、今度…、食事に行きませんか？」

「はあ？」

「勿論、割り勘でいいですから。」

「えっと…、でも…。」

この時、健太の事を話すべきだった…。

「いつでも構わないんで。僕の携帯番号、教えておきますね。」

強引に約束させられてしまった…。

自分より一回りも下の青年に、ナンパ？されてしまった…。

こういう事は、しばらく経験がなかった所為で、私は舞い上がっていたのだろう。

断り切れなかった…。

彼は何となく、健太に雰囲気似ていた…。

顔は全然違っのに、雰囲気…。

イヤ、むしろ、健太の父親の方に似ている。

私の兄の方に…。

「ご迷惑を掛けて、申し訳ありませんでした。」

店長に迷惑を掛けた事を詫びると、

「美希ちゃん、今日は無理しなくていいから。」

店長は、私に気を使ってくる。

「もう大丈夫ですよ。それに、しんどくなったら、今度からちゃんと言いますから。健太にもキツく注意されたし。」

「それにしても、健太君はしっかりしてるね。大人びているっていうか…。美希ちゃんの教育の賜物だね。」

「私は何もしてないですよ。ほつといたら、勝手に育ちましたから。それに、私の前ではまだまだ子供ですよ。」

「そう言えば、この前、『店長は独身ですか』って健太君に聞かれましたけど。俺も結構若く見えるって事かな？」

嬉しそうな店長には申し訳ないが…。

「それは、アイツの挨拶みたいなものですよ。気にしない方がいいで

すよ。」

「ハハ…、そうなの…。」

健太の奴…。

やっぱり、また余計な事、言ってるじゃん！

健太は小さい頃から、大人の男の人に、『独身ですか？』と聞く癖がある。

小さい頃は、意味も分からず言っていると思っていたが、大きくなってからも、時々、言うことがある。

大きくなってからは、聞く人と聞かない人がいるから、彼なりの考えがあるのかも知れない。

その日の夜…。

「…。」

「おい、聞いてんのかよー！」

「あっ、ごめん。何？」

何か話していた健太の声が聞こえず、上の空だった私。

「何じゃねえよ！今日は体調はどうだったかって聞いてんの！」

「あ、ああ、今日は問題なかったよ。子供じゃないんだから、健太は心配しなくて大丈夫だって！」

「それならいいけど…。平気そうに見えなかったから…。」

今朝の青年の事を考えていた私は、深刻そうな顔でもしていたのだろうか…。

健太に余計な心配を掛けてしまった。

しっかりしないと…。

「あつ、そうだ！店長が病院に来てくれた時、あんたはまた余計な事を言ったでしょ！」

「な、何の事…？」

「ああいう事を聞かれて、傷付く人もいるかも知れないんだから、気を付けなさいよ！」

「分かってるよ！」

健太はどうして、『独身ですか？』なんて事を聞くのだろうか？

回り始めた歯車 〈side 健太〉

「今日は、おとなしくしてろよ!」

「分かってるって。」

美希さんは、本当に分かっているのか怪しいもんだ…。

「昼ご飯は作ってあるから。」

「じゃあ、晩ご飯は久し振りに私が作るっか?」

「やっぱり分かってねえじゃん。おとなしくしてろって言ったばかりだろ!」

「ハイハイ、すいませんでした。健太君の美味しい晩ご飯をおとなしく待っています。」

「じゃあ、行ってきます。」

「行ってらっしゃい、っと!」

俺を見送りながら、玄関を閉める美希さん。

本当に大丈夫かよ…。

「あっ、健ちゃん!おはよー!」

「ああ、おはよう。」

「美希さんはもう大丈夫なの？」

「『もう一日休もうか？』って言ったら、『大丈夫だから学校へ行け』って言われた。」

「健ちゃんが浮かない表情なのは、大好きなお母さんが心配だからなんですわねえ。」

「ば、馬鹿、違うよ！心配じゃねえし。それに、お母さんじゃねえし。」

「いいのかな？そんな事、言って！美希さんにチクツちゃうよ。美希さん、悲しい顔すると思うけどなあ！」

「ぐっ…！」

今日も友美に言い負かされ、朝から気分が悪い。

それに、美希さんが心配なのは事実だし。

「よう、坂下！お母さんはもういいのか？」

廊下で、担任の先生にすれ違いざまに声を掛けられた。

「おかげ様でなんとか…。」

「大事に至らなくて良かったな。」

「先生が大袈裟なんですよ。」

「お前も病院からの電話を受けてみれば分かる。絶対パニックになるから。」

この先生は、決して熱血タイプの先生ではないが、面倒見が良く、俺は嫌いじゃない。

「そついえば…、武田先生は独身でしたっけ？」

「結婚してて娘もいるよ。娘がまた可愛いんだ、これが！今度、写真を見せてやるよ！」

「いえ…、結構です…。」

また言ってしまった…。

「先生には、『お母さんじゃねえし』って言わないんだ。」

俺と先生の会話を横で聞いてた友美が、いたずらっぽい笑みで聞いてくる。

「一々、説明するのも面倒くさいだろ？これは、俺が十年間で学んだ事なんだよ。」

美希さんが、俺の実母じゃない事を知ってるのは、そんなに多くない。

勿論、先生は知ってるんだけど、この時はただ面倒くさかったから。

「先生に独身かどうか聞いたのは何で？前も先生ぐらいの歳の男の人に聞いてた事なかったかなあ？」

「さあ…、何でだろう？…単純に気になったから…かな？」

「ふーん…。」

これは、俺が小さい頃からの癖みたいなものだ。

恐らく、聞くか聞かないかの基準があると思うんだけど、自分でもよく分からない。

美希さんが倒れてから一週間ぐらい経った頃、事件は起こった。

まあ…、大した事件じゃないんだけど…。

俺の中では大事件だ。

放課後、いつものように帰ろうとした俺は、二年生の女の先輩に呼び止められた。

「あ、あの…、坂下健太君だよね？」

「はい、そうですけど？」

「私、二年生の高木千里っていうんだけど…。ちょっと…、話があるんだけど…いいかな？」

「はい…？」

高木さんについて行く途中、少し離れた所にいた友美を見つけ、慌てて視線を反らした。

見つかってないよな…？

こういう事に慣れていない俺でも、これから起こりそうな事は、ある程度、想像がつく。

「あの…、いつも一緒にいる子と…付き合ってるの？」

恐らく、『いつも一緒にいる子』とは友美の事を指しているのだろう。

それぐらいは分かる。

「付き合っていない…ですけど。幼なじみ…なだけですが。」

「あの…私ね…、坂下君が好きなの…。良かったら…、私と付き合い合ってください！勿論、私の事よく知らないだろうから、友達から構わないんだけど…。」

ほら、やっぱり…。

俺って、実はモテるのか？

「えーと…、ごめんなさい。俺、好きな子がいるんです…。」

ちょっと惜しい気もするが、いい加減な気持ちで付き合っわけには
いかない。

「いつも一緒にいる女の子？」

「ええ、まあ…。だから、ごめんなさい。」

「やっぱりそうか…。急に変なこと言っでごめんね。ありがとう。」
そう言っただけは、走り去ってしまった。

やっぱり、泣いてたよな…。

少し気が重かった…。

「見たよ、健ちゃん！可愛い女の子だったじゃない！」

「…！」

友美は校門の所で、誰かを待っていた。

最悪だ、よりによって、友美に見られた…。

気付いてないと思ったのに…。

「あの子と…、付き合う…の?」

「断ったから…。」

「よかつ…。」

「…?今、何か言いかけなかったか?」

友美は、何か言いかけて、慌てて口をつぐんだように見えた。

「何も言っていないよ。よし、じゃあ帰ろう。」

「誰か待ってたんじゃないの?」

「いいの、いいの。置いてくよ!」

「ちよつ、待てよ!」

もしかして…、俺を待っていたのか…?

友美とは、昔から一緒に学校へ行ったり、帰ったりする事は多い。

しかし、今日みたいに約束もなく、待っている事は初めてじゃないか?

用がある時は、一緒に帰ろうと言ってくるし、その他の時は、偶然一緒にいる事が多い。

帰る所は、ほとんど同じなわけだから、当たり前だと思ってたんだけど…。

「あー、また私の話、聞いてないでしょ！」

「えっ、き、聞いてたよ！」

「絶対ウソだね！…何か悩み事あるの…？」

「…最近さあ、美希さんの様子が…変なんだよね…。」

まさか本人に向かって、『お前の事で悩んでいる』なんて事は言えるわけもなく、咄嗟にもう一つの悩み事を口に出した。

それに、美希さんの様子がおかしいのも事実…。

「もー、また美希さんの事？」

『このマザコン野郎！』って、絶対思われてる…。

「一昨日ぐらいから、何か考え事してる事が多くてさあ…。」

「子供じゃないんだから、悩み事の二つや三つぐらいあるでしょ。病み上がりだし。それに、人の話を聞かない問題児も一緒に住んでるしね！」

今日の友美の厭味には、いつもよりトゲがある。

「そりゃ、悩み事ぐらいあるだろうけど…。今までも考え事してることもあったけど…。」

今までは、明らかに違う気がするんだよな…。

それに、美希さんは、本当に大人なのかよ、って思う事も多々あるわけで…。

「もしかして…、彼氏が出来たとか！もしくは、出来そうとか！」

「はあー？」

そんな事、考えもしなかった…。

「そんなに驚く事じゃないでしょ？あれだけ綺麗な人に、彼氏がない方が不思議なぐらいなんだから。」

「…。」

「あー、何か面白くなさそうな顔してるー。美希さんが他の男に取られるのが嫌なんでしょ？」

「違うよ！…違うけどさあ…。」

結婚して幸せになって欲しい…。

他の男に取られるのが嫌だ…。

相反するこの二つの気持ちの間で揺れ動く俺。

こういう事が、現実味を帯びてきた今、俺の頭は混乱していた。

「ねえ…、美希さんも確かに大事だけど…、自分自身の事はどうなの？」

「俺の事？」

「健ちゃんは彼女を作らないのかって事…。さっきも…、『断った』って言ってたし…。」

「俺は…、好きな奴いるし…。」

「ふーん…、誰？」

「それは…。お前に言うわけがないだろ…。」

『お前だよ』と言うわけにもいかず…。

「健ちゃんは、美希さんを基準に考えるからダメなんだよ…きつと。」

「『基準』って、どついう意味だよ？」

「あんな綺麗な人は、そうそういないって事。『基準』を下げれば、

簡単に『彼女』が出来るかも知れないと思うよ……。健ちゃんは意外とモテるんだから……。」

「俺って、モテるのか……？」

「さあ？知らない……。」

「何だ、それ？お前が言ったんだろ！」

友美は、この事について、これ以上、話さなかった。

最近、俺の周りで厄介な事が増えてきた。

それは、俺がそれだけ大人になった証拠なんだろうけど……。

しかし、自力で解決出来る程、俺は大人になりきれていない……。

友美と美希さんの事で、俺の頭の中は、容量オーバー寸前だった……。

それぞれの想い 〈side美希〉

あの日以来、例の青年とは、仕事に向かう電車の中で、よく話すようになった。

しかし、私は肝心な事は何一つ話していない。

彼も特に聞いてくるわけではない。

『食事に行こう』って言われた事についても、特に急かされない。

あれは、一種の社交辞令のようなものなのか？

社交辞令にしては、彼が真剣だった気もするが…。

「あのさあ…、有馬く、有馬さん！」

「孝平でいいですよ！」

「じゃあ、孝平君。この前の…、『食事に行こう』って話だけど…。」

無かった事にしてしまうのはどうかと思った私は、彼に聞いてみる事にした。

「都合のいい日あります？」

やっぱり、社交辞令ではないようだ…。

「まだ、予定は立てられないんだけど…。やっぱり、私みたいなおばさんとじゃ、色々難しい問題があるんじゃないかと…。」

自分で、『おばさん』って言っちゃったよ…。

「坂下さんは、『おばさん』っていう歳じゃないでしょ?」

「私はもう…、三十二歳なんだけど…。」

自分で、歳まで言っちゃったよ…。

「そうだったんですか!二十五歳ぐらいだと思ってました。若く見えますね!でも、若く見えるなら、『おばさん』じゃないですよ。」

彼は、年齢については全く気にしていない様子だった。

「若作りし過ぎ…かな?」

「そんな事ないですよ。それから、もし二人だけが無理なら、友達を呼んでもいいですよ。こっちも人数を合わせますから。」

「恥ずかしい話、一緒に行ってくれる友達はいなくて…。」

学生時代に親しかった友人達は、ほとんど結婚しており、私が健太を引き取ってから連絡は途絶えがちになっている。

しかし私は、この状況を誰かに相談したい…。

健太に相談するわけにはいかないし、健太の祖父母も勿論ダメ。

美容室のスタッフには、こういう事は相談したくないし…。

春子さんは…、止めておこう…。

きつと、もつとややこしい事になる…。

そうになると…、春子さんの娘しかいないな…。

いい歳した大人が、女子高生にこんな相談するのは、おかしな話だが…。

それにしても、私の交友関係は狭いな…。

送信『友美ちゃんに相談したい事があります。それで、二人だけで会えないかな？健太には絶対言わないで欲しいんだけど。』

受信『いいですよ。何の相談ですか？』

送信『内容は会ってから話す。くどいようですが、健太には内緒で』

受信『了解！』

私は、本当に大人なのだろうか…。

最近、子供達に迷惑を掛けてばかりいる…。

「ごめんね、急に呼び出したりして。」

「大丈夫ですよ。それよりも、相談って何ですか？」

友美ちゃんは、心なしか、ワクワクしているように見える。

大人の私に頼られるのが嬉しいのか…？

それとも、何かに感付いているのか…？

「くれぐれも健太には内緒にして欲しいんだけど…。実はね…。」

彼女に孝平君の事を話す私。

「やっぱり、そうでしたか。」

「…！『やっぱり』って…？」

「最近、健ちゃんが美希さんの様子がおかしいって悩んでて。私は、彼氏でも出来たんじゃないのかな？と思っていました。」

健太も何か感付いているのか？

「健太は…、何か言ってた？」

「何だか面白くなさそうでしたよ。健ちゃんは『お母さん』が大好きみたいですから。」

友美ちゃんの言葉には、少し苛立ちが含まれていた。

「私は、『お母さん』じゃないんだけど…。」

「前から不思議に思ってたんですけど、美希さんは『母親』だと思われるのは嫌なんですか？」

「嫌じゃないけど…、私みたいなのが『母親』と名乗るのは恥ずかしいっていうか…、健太の実の母親に申し訳ないというか…。」

私は、自分が母親代わりになれているかどうか自信がない。

最近は特に…。

「それは、美希さんの考え過ぎですよ。だって、他人の私から見て、美希さんと健ちゃんは、『母親』と『息子』以外に見えないですから。しかも、とても仲が良い母子に見える…。」

「そうなのかな…。」

「それで、美希さんの彼氏の事ですが…。」

「か、彼氏じゃないよ、まだ！」

「『まだ』って事は、美希さんはその彼の事が、嫌いじゃないんですよね？むしろ、気になっている存在なんですよね？」

「それは…、そう…なんだけど…」

「だったら、深く考える必要はないんじゃないですか？友達みたいな感覚で、食事に行けばいいと思いますよ。その彼と話してみても、色々気付く事があると思うんだけど。」

「それでいいのかなあ…。」

「その彼ってどんな人なんですか？」

「健太の父親に似ているんだよね…。顔じゃなくて雰囲気か…。」

「それって、美希さんのお兄さんですよね？」

「うん。」

「何をしてる人なんですか？」

「学生…。」

「えっ！…学生？いくつなんですか？」

「えーと…、二十歳。」

「ハタチー！」

「ちよつ、声大きい！」

「すみません…。美希さんって…、凄いですね…。」

「ま、まあね…。」

彼の年齢を聞いて啞然とする友美ちゃんに、私は苦笑いを浮かべて自虐的に開き直ってみせた…。

「ついでだから、私も美希さんに相談しようかな…。」

「何を？」

「美希さんは、健ちゃんの好きな女の子って誰だと思えますか？」

「えっ！誰って…、友美ちゃんじゃないの！」

「美希さんもそう思いますよね？でも…、私、自信がなくて…。」

「『自信』って？」

「健ちゃんの中では、優先順位の一番は、いつも美希さんだから…。健ちゃんは、誰とも付き合う気はないんじゃないかと思ってて…。」

「それこそ、友美ちゃんの考え過ぎだよ。アイツだって、もう高校生なんだし、恋人ぐらい欲しいんじゃないかな？」

「でも、健ちゃんの基準は美希さんだから、私なんかじゃダメだと思っちゃって…。」

「健太は、自分の考えを悟られないように隠すところがあるからね

…。でも、私が見る限りでは、友美ちゃんが好きという事は、隠し切れていないけどね。」

健太が、自分の気持ちを隠すように育ってしまったのは、多分、私の所為だろう。

私が至らない所為で、友美ちゃんにも辛い思いをさせてしまっている。

「美希さんにそう言って貰えると、少し自信が出てきました。」

「うちのバカ息子に、友美ちゃんは勿体ないぐらいなのに。アイツは何を考えているんだか…。」

恋愛方面に関しては…、私の所為じゃないよね？

「それにしても、美希さんとこんな話をするとは思ってもしいなかったです。」

「それは、私も一緒…。」

「美希さんに、一つ聞いてもいいですか？」

「何？」

「仮に…、仮にですよ、私が健ちゃんと結婚したとして、美希さんも嫁いびりとかするようになるんですかね？」

「するわけないでしょ！むしろ、友美ちゃんみたいなお嫁さんなら、健太より大事にするよ！」

私は、友美ちゃんを応援しつつ、少し寂しい気持ちだった…。

健太は、いつか私の下を離れて行ってしまおう…。

これがそう遠くない事を、実感せざるを得なかった。

それぞれの想い 〈side 健太〉

「今日は友美ちゃんのご飯食べて来るって言ったでしょ。」

いつもより遅く帰ってきた美希さんが、晩ご飯を作って待っていた俺に言った。

「はあ？何だよそれ！聞いてねえよ。美希さんの分も作っちゃったろ！」

「メールしたよ。」

携帯を確認するも、美希さんからの受信はない。

「メールなんて来てねえぞ！」

「あれ？…、あつ…！保存ボックスに残ってた！…ごめん…。」

この人は、いつもどこか抜けている。

「ふざけんなよ！まったく…、明日、食べよ！」

「はい…。」

いい歳して、高校生の俺に怒られてシユンとなる美希さん。

美希さんがこんなだから、いつも俺がしっかりしなきゃ、と思うんだよな…。

「友美と二人なんて珍しいじゃん…。アイツと二人で出掛けた事なんて無かっただろ？」

「健太には言えない、女同士の話。」

「何だよそれ！」

美希さんは何か俺に隠していた。

「昨日、美希さんと会ってたんだろ？何の話だったんだ？」

次の日、友美にも聞いてみる。

「健ちゃんには言えない、女同士の話。」

「お前もかよ！…もしかして…、美希さんの彼氏の事？」

「…！彼氏はいないって言ってたよ…。」

直感的に友美は嘘をついていると思った。

同時に漠然とした不安も感じた。

「もし仮に…、美希さんが結婚したら…、俺はどうなると思っ？」

俺は思わず、不安を口にする。

「どつという意味？」

「俺は捨てられるんじゃないか…と。」

結局のところ、俺はこれが一番心配なのかも知れない。

「そんな事あるわけないでしょ！美希さんが、そんな人に見える？」

友美は俺の疑問を否定するが、不安は消えない。

「でも…、俺は美希さんの息子じゃないわけだし…。」

「はあ…。本当にあんた達は…。あのね、健ちゃん。美希さんと健ちゃんは、どつからどう見ても、『母親』と『息子』なの！実の母親じゃないとか、実の息子じゃないとか関係なく。」

「…。」

「だから、何も心配ないよ！それに、美希さんの中で健ちゃんの存在って、凄い大きいと思うよ。」

「そつだといいいんだけど…。」

友美にそう言われると、少し不安は和らいだ。

「仮に美希さんが、恋人とか旦那さんの所為で、健ちゃんを見捨てたりする事があつても、私は健ちゃんの味方だから…。」

「…！」

結構、衝撃的な発言だったような…。

友美は、俺が不安を抱えていると、いつもそれを打ち消してくれる。

多分、友美のそういうところが好きなんだろうな…。

今更ながら、俺の中における友美の存在の大きさを痛感した。

そろそろ、中途半端な関係に決着をつけないといけない時期になってきたのかな？

友美まで、他の男に取られないように…。

例え結果が、望んだ通りにならなくても…。

「健太って、友美ちゃんが好きなんだよね？」

「えっ、はあ？」

その日の夜、突然、美希さんがとんでもない事を言い出した。

「健太は隠しているつもりでも、私にはバレバレだから。」

俺の顔を見て、ニヤリとする美希さん。

何でバレてるんだ！

「美希さんには関係ないだろ！」

「まあ…、そうなんだけどね…。」

そう呟いた美希さんはなんだか淋しそうだった。

「美希さんは…、彼氏がいるのか…？」

この時、俺は何故こんな事を聞いたかよく分からない。

「もしいたら…、どうする？」

「はあ、えっ！」

「何を慌ててるの？例えばね話だよ…。」

「別にどうもしねえよ…。いいんじゃないの…。」

「ふーん…。健太も友美ちゃんとの事を、はっきりさせた方がいいよ。いなくなつてから気付いても、遅いんだからね。」

「分かってるよ…。」

最近、美希さんが、何を悩んでいたのか、少し分かった気がした。

もし、美希さんに彼氏が出来た場合、俺にちゃんと紹介してくれる

のだろうか？

その時、俺は、どういう態度を取るのだろうか？

その時の俺の態度は、美希さんの今後の人生を決めてしまっても知れない。

責任重大だな…。

来るべき時に備えて、心の準備をしておく必要があるな…。

「明日は、晩ご飯は食べて来るから…。」

「ふーん…。また友美と？」

「明日は違うよ。友美ちゃんだって、そう何度も私に付き合ってくれないよ。」

「もしかして…、彼氏とか…。」

「ち、違うよ！友達…。」

「ふーん…。」

告白 〈side 美希〉

「実は僕…、あの日より前から、坂下さんの事を知ってたというか、見てたというか…。」

「そう…だったの…。」

私は、友達と食事に行く感覚で、孝平君と食事に来た…つもりだった…。

しかし、これまでの孝平君の態度やこの日の様子から、私に好意を持っている事ぐらい分かる。

「僕はまだ学生だから、坂下さんの恋愛対象にはならないかも知れないんだけど…。」

「…。」

「僕と付き合っただけです。勿論、今すぐにじゃなくてもいいので、前向きに考えて欲しいというか…。」

やっぱり、そう来るか…。

「私、孝平君に言っていない事があった…。」

彼の事は嫌いじゃない…。

むしろ、話しているうちに、少しずつ彼に惹かれている…。

「彼氏が出来た…とか…」

「違う、違う、そうじゃなくて…」

どうにも切り出す勇気が出ない。

「…？」

「私には…、息子がいるんです！」

「はあ、えっ！」

「私が生んだんじゃない、甥を私が引き取って育ててるんだけど…。」

「…。坂下さんには…、いつも驚かされますね…。」

「孝平君の気持ちは嬉しいんだけど…、私はそれに応える事が出来ない…と思う。」

彼は、少し考え込んだ後…。

「確かに驚きましたけど…。子供がいるから付き合えないというのは、少し違うような気がします…。」

「…？」

彼は、今まで私に言い寄ってきた男と、少し違うようだ。

「僕が、まだ学生だから付き合えない、って言うなら分かりますが

…。子供がいるいないは関係なく、坂下さんが、僕をどう思っているかが重要だと思うんです。」

「…。」

「僕じゃダメだと言うなら諦めますけど、そうじゃないなら、前向きに考えて欲しいんです。」

「子供がいても？」

「坂下さんが、今までどんな苦勞をしてきたか、少しぐらいは僕だって分かります。でも…。」

「…。」

「今まで一人で抱えてきたものを、僕が少しだけ手伝う事は出来ないでしょうか？」

この時点で、私の涙腺は崩壊した。

健太を引き取って以来、張り詰めていたものが切れてしまった。

不覚にも、孝平君の前で涙を見せてしまった私。

人前で泣いたのは、何年振りだろうか？

少し落ち着いて孝平君を見ると、彼は私の涙を見てあたふたしていた。

それが少し可笑しかった。

「いきなり泣いて、ごめんね。」

「あ、いや、まあ……。」

「私の返事だけど……、一応、前向きに考えてみるという事でいい？」

「あ、はい……、宜しく願います……。」

「でも……、一つ問題があつて……。」

「息子さんの事……ですよね？」

「うん……。」

「今度……、会わせて下さい。良かったら、三人でどこか遊びに行きませんか？」

「聞いてみる……。」

さて、どうしたもんか……。

私の周りには、私達親子を助けてくれる人達が沢山いる。

しかし、私はその人達に甘えず、一人で抱え込んできた。

それが、人の親としての強さみたいなものだと思ってきた。

結果として、健太一人だけに、私の支えとなって貰う事を強要してきたのかも知れない。

健太は、ほとんど我儘を言わない。

自分の気持ちを悟られないように振る舞う。

今年、高校生になったばかりの少年に、十年間も様々な我慢を強いてきた。

私が凶々しいぐらいに、周りをもっと頼れば、健太には違う未来があつたかも知れない。

『独身ですか?』という健太の口癖は、彼のSOSだったのだろう。

健太と一緒にあって、私を支える人が欲しいという彼なりの…。

「ねえ、健太!…今度、どこか遊びに行こうか…?」

「はあ?二人で?何でまた急に?」

どうやって切り出すか迷っていた私だが、少し遠回りに健太に切り出した。

「えーと…、私の友達…と、三人で…。」

「それって…、男の人だよな？」

「そう…だけど…。」

「ふーん…。考えておく…。」

「うん…。」

緊張した…。

健太はどう思ったんだろう？

感情が分かりにくいんだよね…、アイツは…。

告白 〈side 健太〉

「俺達の関係ってさあ…、何だろうな？」

放課後、いつものように一緒に帰る友美に聞いてみる。

この日は、ある決意を持って…。

「…！友達…かな？」

俺の決意がなんとなく伝わってしまったのか、友美は少し身構えた気がした。

「お前さあ…、好きな奴いるの？」

「…！今日はどうしたの？何か変だよ。」

俺の友美に対する気持ちは、美希さんにバレていた。

美希さんが気付いているという事は、友美本人にも気付かれていると思っただ方がいい。

それなのに、今まで一緒にいてくれたという事は、友美も同じ気持ちのはずだ。

そう自分に言い聞かせ、勇気を振り絞る。

「俺…、お前が…好きなんだ！」

「えっ！」

「驚かせちゃったかも知れないんだけど…、ずっと前から…。俺と付き合っただけだ！」

「嘘…。」

「こんな事…、嘘ついてどうするんだよ。」

「健ちゃんは…、誰とも付き合う気はないと思ってた…。」

「俺だって男だし、彼女が欲しいに決まってるだろ…。」

「だって健ちゃんは…、いつも美希さんが一番だから…。」

「美希さんは確かに大事な人だけど、友美はまた別の意味で大事なんだよ。」

「…。」

友美は、何故か目に涙をためている。

その涙は、どっちの涙なんだ？

「返事…、聞かせてもらってないんだけど…。」

「も、勿論、オッケーに決まってるじゃない！私で良かったら…。」

「良かった…。」

本当に…、良かった…。

「私達の事、美希さんが聞いたらびっくりするかな？」

「どうだろう？俺の気持ちには、気付いてたっぽいけど。」

「私だつて気付いてたよ。でも、健ちゃんは、私の気持ちには気付いてないと思つてたけどね。」

やっぱり、友美にも気付かれてたんだな…。

こんな事なら、もっと早く何とかするべきだった。

「最近、美希さんにもさあ…。」

「また美希さん…？」

呆れ顔の友美…。

「やっぱり、何でもない…。」

出来たばかりの『彼女』に、『マザコン』と呆れられるのはさすがにまずい。

もう、『マザコン』ってバレてるんだけどね…。

「何よ！言いかけたなら、言いなさいよ…。」

「…、美希さんにも、彼氏が出来たみたいなんだよ…。」

「あっ、やっぱり!」

「お前、何か知ってただろ!」

「さ、さあ?何の事…?」

今にして思えば、友美は凄く分かりやすい。

思ってる事が、態度に出るから…。

「最初、お前に、『美希さんに彼氏が出来たんじゃないか』って言われた時は、確かに面白くなかったんだけど…。今は何だか、ホッとしてるんだよ。」

「どづいう事?」

「俺もよく分からないんだけど…。俺の所為で、美希さんに色々、我慢させているんじゃないかと思ってたから…かな。」

「健ちゃんも、『マザコン』卒業かな?」

「大切な人である事は変わらないよ。」

「私も同じくらい、大切にしてくれる?」

「ああ、多分。」

「『多分』って何よ!」

照れ隠しで、余計な一言を言ってしまった…。

「ところで…、『付き合う』って、具体的に何をすればいいんだ？
初めての事だから、よく分からないんだけど。」

「…？いつも一緒にいるとか…かな？一緒に学校へ行ったり、帰ったり…。」

「それって…、今までと、あんまり変わってなくねえか？」

「私だって、よく分からないんだもん！…あとは、どこかに遊びに行くとか…かな？」

「遊びに行くといえは…。今度、美希さんの彼氏に会うかも知れないんだけど…。お前…、一緒に付いて来てくれない？」

「はあー？それって、どうなの？」

「三人で会うのは気まずいから、お前もいてくれると助かるんだけど…。」

「確かに、美希さんの相手がどんな人なのか気になるけど…。」

「二人だけで遊びに行くのは、また今度という事で…。その前に、
予行演習というか…。」

「赤の他人の私がいたら、その男の人も、迷惑じゃないかな？」

「赤の他人ってわけじゃないだろ。将来、義父と嫁になるかも知れ

ないんだから。」

「…！健ちゃん…、今、凄い事を言ったの分かってる？」

顔を赤らめている友美は、今までで、一番可愛く見えた。

確かに、プロポーズみたいな事を言ってしまったが…。

この時、将来、友美と俺が結婚する事は、違和感なく想像出来た。

彼女が出来た俺が、舞い上がっていただけかも知れないが…。

「一応、考えておいてくれよ。美希さんにも、お願いしてみるから。」

「私が付いて行って、本当に大丈夫なのかなあ…。」

「この間の、『どこかに遊びに行こう』って話だけどさあ…。」

よく考えると、おかしい話だが…、美希さんに話してみる。

「…！うん…。」

美希さんは、俺がどんな事を言い出すのか不安そうだった。

「友美も一緒に行ってもいいかな？」

「はあー？友美ちゃんは関係ないじゃん！」

「それが、全く関係ないって事はないというか…。」

「どづいう事？」

「俺…、友美と付き合う事になって…。」

「はあー？『付き合う』って、恋人同士になっただけで事？」

「…。それで、どこかに遊びに行こうって話をしたんだけど、二人だけだと少し照れ臭いっていうか…。」

「デートに親が付いて行くなんて、聞いた事ないよ！」

「俺もないけど…。それにこれはデートじゃなくて…。美希さんとその彼氏と、俺の三人だけというのも何か気まずいから…。」

「友美ちゃんは何て言ってるの？」

「一応、話してみたけど…。」

「そういう事は、二人だけで行った方がいいって！」

「これは、デートじゃないんだろ？もしデートなら、俺が美希さん達に付いて行くのもおかしいわけだから。」

「そうだけど…。」

「女性の客観的な意見っていうのも気になるだろ。」

「それは…、そうだけど…。」

「その人に、聞いてみてくれよ。ダメならダメでいいから。」

「一応、聞いてみるけど…。」

多分、俺は相当おかしな事を言ってるな…。

「その男の人って、何してる人なの？美希さんの同僚？」

「えーと…、同僚じゃなくて…。美容師専門学校の学生…。」

「はあ？学生？歳はいくつだよ！」

「二十歳…。」

「はあー？ハタチー！」

美希さんより、俺の方が歳が近いじゃん！

今まで、一緒に暮らしててよく分かっていたけど…。

美希さんは、友美が言うように、『凄い美人』なのかも知れない…。

確かに、若くは見えるんだけど…。

美希さんは、俺がいたから色々な事を我慢していたのは間違いない。二十歳そこそこで俺を引き取り、十年間も育ててくれた恩というのは、俺が思っている以上に大きいのかも知れない。

二十歳から三十歳といえば、普通の女の人は恋人と遊んだり、結婚したりする年頃。

しかし、美希さんはそれを、俺の為に犠牲にしてきた。

美希さんが、ようやく自分の事に目を向ける時間が出来た今。

少し大人になった俺は、それを見守ったり、応援したりする事が出来るはず。

それが、今までの恩に報いる事に繋がると信じたい。

でも、やっぱり…。

少し寂しいよ…、お母さん…。

奇妙なWデート ～side美希～

「『息子に会わせてくれ』って言ってた事なんだけど…。」

孝平君に聞くかどうか迷っていたが、聞かないと先に進まないと思
った私。

「息子さん…、何て言っていました？」

不安そうな彼の顔。

「それが…、難しい問題が出来て…。」

「そうですか…。。やっぱり…。」

彼は少し勘違いをしたようだ。

「えーと、孝平君が考えている事とは、違う問題だと思っただけど…。。」

「…?」

「孝平君には会ってもいいと言ってるんだけど…。」

「僕に直接会って、反対したいという事ですか？」

「そうじゃなくて…、反対ではないみたいなんだけど…。」

「良かった…。。じゃあ、問題ないじゃないですか？」

「健太がね…、『健太』って息子の名前なんだけど…。自分の『彼女』も一緒でもいいか、と言い出して…」

「『彼女』って、恋人の事ですか？最近の子供って進んでるんですね。」

「ん？」

彼は、まだ何か勘違いしているような…。

「僕は構いませんよ。健太君も、自分一人じゃ不安なんでしょ。」

「本当にいいの？」

「大丈夫ですよ。何処に行きましょうか？遊園地とかがいいかな？」

「そういう所に行きたいタイプじゃないと思うんだけど…」

「水族館とかは、どうですか？今は、大人も子供も楽しめるって言いますし。」

「そう言えば、昔、健太と二人で行った事あるなあ。」

「息子さんの意見も聞いておいて下さいね。」

「うん、分かった…。」

何かおかしな事になってきたような…。

昔、健太を引き取ったばかりの頃、ふさがちだった健太を元気付けようと、水族館に連れて行った事を思い出した。

あの時、健太は私の手や服を片時も離さなかった。

同世代の子供達が、元気にはしゃぎ回る中、小さな手は私を離さなかった。

健太は、もう頼れる人は私しかないと、幼心に感じていたのかも知れない。

生きて行く為の本能が、そうさせたのかも知れない。

例え本能がそうさせたとしても、私には充分だった。

その小さな手は、私の決意を揺るぎないものにしてくれた。

何があっても、この子だけは私が守るといふ、世間知らずの小娘の決意を…。

そして当日…。

「彼が、友達？の有馬孝平君。」

「どうも…。」

「初めまして。」

何故か三人共、啞然としている。

初対面だからなのかな？

「それで、この少年が健太で、そっちの女の子が健太の彼女で、竹内友美ちゃん。」

「…、息子さんって…、こんなに大きい子だったんですか？」

健太と友美ちゃんを見て、啞然としていた孝平君が、ようやく口を開く。

「…？どういう事？」

「小学生ぐらいの男の子かと思っていました…。彼なら、彼女の一人や二人いて当たり前ですよね…。」

「あれ？言ってなかった？」

健太は私を見て呆れている…。

言っただけだと思っただけだ…。

「ところで…、孝平さんは、独身ですよね？」

バシッ！

「痛っ！」

思わず、手が出てしまった。

あれほど注意したのに、健太の奴…。

最初は少し驚いていた健太だったが、時折、笑顔を見せている。

もっと、無愛想に振る舞うと思っていただけに、意外だった。

孝平君を気に入ってくれたと思ってもいいのか…、それとも…。

健太の感情は、表に出ているものと違う場合が多いからなあ…。

私と孝平君は、まだ少しぎこちない感じがするのに対し、健太と友美ちゃんは妙にしっくりしていりように見える。

長年連れ添った夫婦のように…。

それを見ていた私は、寂しさを感じると同時に、羨ましくもあった。

健太はこれから先、こうして私の下を離れて行くんだろうな…。

私と孝平君は、健太と友美ちゃんのようになれるだろうか？

正式に恋人同士になったわけじゃないのに、私も気が早い…。

それにしても、友美ちゃんは、健太のどこがいいのだろうか？

「ちょっと、お土産見て来てもいい？」

「あつ、私も行きます。」

「じゃあ僕は、あそこで待ってますよ。」

「健太はどうする？」

「俺も待つてる。」

健太と孝平君を、二人だけにするのは少し怖かったが、健太を信じる事にした。

健太はもう、子供じゃないんだし、大丈夫だろう…。

「ねえ、美希さん。孝平さんっていい人ですね。それに、カッコいいし。」

「そう…かな？」

友美ちゃんに孝平君を誉められ、何故か私が照れてしまった。

「あの二人、何か話してるのかな？」

「どうだろう？」

チラッと彼等を見ると、微妙な距離を空けて、何か話しているように見える。

何を話しているのだろうか？

「友美ちゃんに、聞きたい事があるんだけど…。」

「何ですか？」

「健太のどこがいいの？それなりにカッコいいとは思っけど、アイツって無愛想だし。」

「そんなに無愛想じゃないですよ。結構、面白い事も言うし、小さい頃から、私とはよく話してくれるし。」

「そうなの？」

友美ちゃんに少し嫉妬した。

だったら私にも、もう少し愛想良くしてくれてもいいじゃん！

「多分、美希さんには照れがあるんじゃないかなあ？」

「私をもっとしっかりしてれば良かったのかなあ？」

健太が大きくなってからは、いつも私の方が怒られている気がする。

「美希さんの事が、放って置けないんだと思いますよ。いつも、美希さんの心配ばかりしてますから、最近は特に。」

友美ちゃん言葉から、『もっと私を見て』という主張が見て取れた。

「何か…、ごめんね…。」

思わず彼女に謝ってしまった。

「何を謝ってるんですか？私は、母親思いの健ちゃんが好きなんですから、美希さんが謝る事はないですよ。」

「母親思いねえ…。」

「『このマザコン野郎』って思った事も、ありましたけど…。」

「…！健太って『マザコン』なの？」

「多分、世間一般的には…。」

知らなかった…。

私が、子離れ出来ていないだけかと思ってた…。

それにしても、健太は運がいい。

こんなにいい子が、いつも側にいてくれたのだから。

友美ちゃんは健太に勿体ないくらいだよ…。

その日の夜…。

「どう…だった？」

恐る恐る、健太に聞いてみる。

「何が？」

コイツ、分かってて言ってるだろ！

「だから…、孝平君…。」

「うーん…、いい人だと思うよ。でも…。」

「…でも？」

「『お父さん』とは…、呼べそうもないな…。」

「反対って…事？」

やっぱり、難しかったか…。

タイミングが、早すぎたか…？

「反対じゃねえよ。美希さんが、『孝平さんがいい』って言うなら、俺は別に構わないよ。」

「もうちょっと分かりやすく言いなさいよ…。」

分かりづらんだよ、あんたの反応は！

「だから…、孝平さんはいい人。反対はしない。美希さんの好きにして大丈夫。もし結婚しても、歳が近過ぎて、『お父さん』とは呼べない。…以上。」

「そう…。」

取り敢えず、ホツとした。

「孝平さんと…、結婚するつもりなの？」

しばらく黙っていた健太が、突然、口を開く。

「ま、まだそんな事まで考えてないよ！『付き合っただけで欲しい』とは言われたけど、返事は保留にして…。」

「もし…、俺の事を気にしてるなら、大きなお世話だからな。俺はもう、ガキじゃないんだから。これからは、美希さんの好きなよう

にしたらいい。」

「偉そうに……。まだ子供のくせに……。」

ヤバイ、泣きそうだ……。

「孝平さんの雰囲気ってさあ……。何か懐かしい感じがしたんだけど……。何でだろうな……。」

健太も、私と同じような印象を持ったようだった。

「健太のお父さんに似ているんだよ、きっと……。」

「ふーん……。あんまり覚えていないんだけどなあ……。」

『俺の事は気にするな』か……。

でも……。やっぱり気にするよ……。

今の私は、健太も含めて『私』だから……。

奇妙なWデート ～side健太～

「美希さんの彼氏が、『いいよ』って言うてくれたみたいだよ。」

「何を？」

「だから、お前が一緒でもいいってよ。」

「健ちゃん、本気だったんだ…。」

「当たり前だろ！…、お前が一緒の方が心強いから…。」

「『彼氏』にそこまで頼られたら、嬉しいかも…。」

顔を赤らめる友美。

俺達が、『彼氏』と『彼女』になってから気付いた事がある。

実は、友美はもの凄く可愛いんじゃないかと…。

俺には、勿体ない女の子なんじゃないかと…。

今まで、彼氏がいなかったのが不思議でしようがない。

「それで、水族館はどうかって言ってるらしいけど。」

「水族館か…。小学生の時、遠足で行った所かなあ？健ちゃんは覚えてる？」

「覚えてるよ、勿論！」

忘れるわけがない。

その水族館は、俺が友美の事を好きになった場所だから。

あの時、水槽を見続けていた俺は、危うくみんなに置いていかれそうになってしまう。

そんな俺の手を取り、みんなの所へ引つ張って行っただのが友美だった。

初めて握った友美の手は、柔らかく、そして暖かった。

そう言えば、小さい頃、美希さんと出掛けた時は、いつも美希さんの手を握っていたような…。

いつの間にか、手を繋ぐ事は無くなったけど…。

「何？私の手がどうかした？」

俺は、無意識に友美の手を見ていたらしい。

それを友美に気付かれる。

「べ、別に…。」

「…？もしかして…、手…繋ぎたいの？」

「そ、そんなんじゃないよ！」

「繋ぎたいなら、別にいいよ…、恋人同士なんだから…。はい…。」
「…。」

差し出された友美の手を、そつと握る。

あの時より大きくなった手は、あの時と変わらず、柔らかく、そして暖かった…。

それにしても、美希さんの彼氏は、俺のおかしなお願いを快諾してくれたと言つが…。

二十歳の学生って言ってたけど、凄くいい人なのかも知れないな…。

そして当日…。

「彼が、友達？の有馬孝平君。」

「どつとも…。」

孝平さんは、想像していたよりも大人に見えた。

「初めまして。」

何故か孝平さんは、僕達を見て唾然としている。

初対面だからなのかな？

「それで、この少年が健太で、そっちの女の子が健太の彼女で、竹内友美ちゃん。」

美希さんに、『彼女』と紹介された友美は、少し顔を赤らめた。

「…、息子さんって…、こんなに大きい子だったんですか？」

「…？どういう事？」

「小学生ぐらいの男の子かと思っていました…。彼なら、彼女の一人や二人いて当たり前ですよね…。」

「あれ？言ってなかった？」

どうして美希さんは、いつもそうなんだよ…。

俺の事を、どういう風に話していたんだよ、まったく…。

「ところで…、孝平さんは、独身ですよね？」

バシッ！

「痛っ！」

なにも、叩く事はないじゃないか！

想像以上に大人っぽくて、最初は戸惑ったが、孝平さんは、思っていた通りいい人だった。

話も面白いし、俺達にも気を使ってくれる。

それに、しっかりしてて、どこか抜けたところのある美希さんには丁度いい。

二十歳の学生っていうから、どんな奴だよ！って思っていただけに余計に意外だった。

少し気になったのは、友美の反応だった。

友美も気に入っているとは思うけど…。

もし友美が、孝平さんを好きにでもなってしまったら、俺はどうすればいいんだ！

やっと、長年の想いが通じたというのに…。

それに、美希さんだって…。

ただでさえ、俺の存在がハンデになっているのに、三十路女と女子

高生じゃ勝負にならないだろ！

友美を連れて来たのは、失敗だったか？

「孝平さんっていい人だね。」

「ふーん…。」

俺の心配を余所に、能天気な友美に少しイラついた。

「もしかして…、妬いてるの？」

「そ、そんな事ねえよ！」

「健ちゃん、可愛い…。そういうところも、好き…。」

「…！」

男にとって、『可愛い』は誉め言葉じゃねえよ！

「ちょっと、お土産見て来てもいい？」

「あっ、私も行きます。」

「じゃあ僕は、あそこで待ってますよ。」

「健太はどうする？」

「俺も待ってる。」

俺は、孝平さんと少し話がしたかった。

孝平さんも、美希さん達に付いて行かなかったのは、俺と話がしたいはずだから。

「健太君達は、本当の親子じゃないなんて、信じられないぐらいだよ。どつからどつ見ても、『母親』と『息子』にしか見えないよ。」

「そんな事、ないですよ…。お互い遠慮してる部分もありますから。」

「実の親子だって、遠慮ぐらいするよ。高校生になれば。」

「そんなもんですかねえ…。孝平さんは…。大人ですね…。学生って聞いてたから、もっとチャラチャラした奴かと思ってました。」

「僕は、坂下さんの前では、大人に見せようと背伸びしてるだけだよ。」

「それを自覚してるって事は、大人って事だと思います。」

「そんなもんですかねえ…。」

俺の口調を真似て、ニヤリとした孝平さんを見て、吹き出しそうになった。

穏やかな口調で、俺の発言を諭すように話す孝平さんの言葉は、俺には凄く心地よかった。

俺が幼かった頃、聞いた事があるような、心地よい響きだった。

「孝平さんに聞きたい事があるんですけど…。」

「何？」

「美希さんのどこがよかったですか？」

孝平さんなら、美希さんじゃなくても、同年代の女の人にモテるだろうに…。

「正直な話、彼女の外見に惹かれたのは事実だよ。最初は、もっと若いと思ってたし。」

「…。」

若く見えるというのは、分かるけど、美人かどうかは、俺には分からない。

「それに、僕にとって年齢差は、大して問題じゃないんだよ。うちの両親も十歳離れているからね。」

「そうだったんですか…。」

「一番の理由は…、彼女と話しているうちに気付いた事があって…。」

「…？」

孝平さんは少し言い淀み、チラッと俺を見た。

「彼女が、誰かに支えられながら、無理矢理立っている感じがしたんだよ。危なっかしいというか…。」

「…。」

「今思えば、健太君が一人で支えていたんだけど…。僕も、一緒に支えてあげたくなったってとこかな。」

「…！」

危うく、涙が出そうになった。

直感的に、この人なら大丈夫だと思った。

一緒に支えてくれそうな人に、巡り合えた気がした。

それにしても、こんな人と巡り合えた美希さんは運がいい。

美希さんには勿体ないぐらいだ。

でも…、もし仮に、美希さんと結婚しても、『お父さん』とは呼べそうにはないな…。

いくら何でも、俺と歳が近過ぎる。

どちらかと言えば、兄みたいな感じかな？

そして、その夜の…。

「どう…だった？」

恐る恐る、美希さんが聞いてくる。

「何が？」

美希さんは、何が聞きたいか分かっていたが、わざととぼけた。

「だから…、孝平君…。」

「うーん…、いい人だと思うよ。でも…。」

「…でも？」

「『お父さん』とは…、呼べそうもないな…。」

「反対って…事？」

そいいう意味じゃなくて！

あー、もう、メンドくさいなあ！

「反対じゃねえよ。美希さんが、『孝平さんがいい』って言うなら、俺は別に構わないよ。」

「もうちょっと分かりやすく言いなさいよ……。」

何で分かんないんだよ！

「だから……、孝平さんはいい人。反対はしない。美希さんの好きにして大丈夫。もし結婚しても、歳が近過ぎて、『お父さん』とは呼べない……以上。」

これで分かっただろ！

「そう……。」

美希さんは、ホツとしたようだった。

「孝平さんと……、結婚するつもりなの？」

気になってしょうがなかった事を聞いてみる。

「ま、まだそんな事まで考えてないよ！『付き合っただけ』とは言われたけど、返事は保留にして……。」

ちよつと、ホツとしたが……。

「もし……、俺の事を気にしてるなら、大きなお世話だからな。俺はもう、ガキじゃないんだから。これからは、美希さんの好きなよう

にしたらいい。」

「偉そうに…。まだ子供のくせに…。」

そんな事は分かってるんだよ！

「孝平さんの雰囲気ってさあ…、何か懐かしい感じがしたんだけど…。何でだろうな…。」

疑問に思った事を聞いてみた。

「健太のお父さんに、似ているんだよ、きっと…。」

「ふーん…。あんまり覚えていないんだけどなあ…。」

それで、懐かしい感じがしたんだな…。

健太と友美ちゃん ｾｻi d e 美希

「ただいま!…?」

その日、仕事から帰ると、健太の物とは違う靴が玄関にあった。

女の子の靴だ。

心当たりは一人しかいないが…。

「おかえりなさい、美希さん。お邪魔してます。」

やっぱり、友美ちゃんだった。

「あつ、いらつしやい…。」

居間のテーブルには、勉強道具が置いてある。

二人で勉強してたんだよね…?

「おお、おかえり。今日、友美もうちでご飯を食べてくから。もうすぐ出来るよ。」

いつもと変わりが無い健太。

「ああ、そう…。」

私は二人を見て、不安感に襲われた。

友美ちゃんは、制服姿だったから、学校が終わってそのまま来たんだよね？

私が帰って来るまで三時間弱、二人きりって事だよな？

年頃の二人を、そんなに長い時間、二人だけにして大丈夫だったのか？

二人がまだ小さかった頃は、危ないから二人きりにする事はしなかった。

少し大きくなってからは、友美ちゃんがうちに来る時は、健太じゃなく私に用事がある事が多かった。

二人が付き合い始めたこれからは、今日みたいな状況になる場合が多くなってしまう。

これは、一度、釘をさしておく必要があるかも…。

間違いが起こる前に…。

まったく、どういってもりだったのよ、健太は！

友美ちゃんも、無防備過ぎるでしょ！

何だか、苛立ちが抑えられない。

「健太、ちょっと話があるからこっち来なさい！」

私の言葉には、苛立ちが含まれていた。

「…？なんだよ、もうすぐご飯出来るぞ！食べながらでいいだろ？」

「いいから、こっちに座りなさい！友美ちゃんも一緒に。」

「…？」

私の苛立ちは、友美ちゃんにも、伝わってしまったかも知れない。

「あなた達は、付き合ってるという事でいいんだよね？」

「そうだけど…？」

「はい…？」

怪訝そうな顔で返事をする二人。

「状況からして、勉強していたであろう事は分かるわよ。でもね、あなた達は、もう子供じゃないのよ。」

「なんだよ、子供って言ったり、そうじゃないって言ったり！」

「私が言いたいのは、精神的にはまだ子供でも、体は大人だという事。」

「…？」

意味がよく分かっていない健太に対し…、

「…！」

友美ちゃんは分かったようだ。

「恋人同士が二人きりしていると…、何か…変な空気っていうか…、気分になるかも知れないでしょ…。」

「ば、馬鹿じゃねえの！俺達は、まだそんな段階じゃねえよ！」

ようやく健太も分かったようだ。

「『まだ』って事は、いずれそうなる事もあるって事でしょ？」

「…！」

「…。」

二人共、顔を赤くして俯いてしまった。

「もし二人に、何か問題が起きた時、それを解決する事は、あなた達だけではまだ無理でしょ？」

「…。」

「だから、今はまだ、私や春子さんが目の届く所で行動して欲しいの。」

「それだと、友美と二人で遊びに行く事が出来ないじゃねえか！」

「そういう事を言っているんじゃないの。二人きりでいるなどとは言わない。要は、一時の感情に流されず、よく考えて行動しなさいという事。」

「…。」

「自分で責任が取れる取れないに関わらず、周りからは、自分の行動に責任を取らなければいけない年齢になったと、認識されているという事を覚えておいて欲しいの。」

上手く伝わったかどうか不安だったが…。

「美希さんが言いたい事は、何となく分かりました。今度から気を付けます。」

「ごめんね、こんな事を言って。春子さんにも迷惑を掛けちゃうかも知れないし…。」

「うちの母は大丈夫ですよ。」

イマイチ納得がいかない表情の健太に対し、友美ちゃんは分かってくれたようで安心した。

我ながら、自分勝手な事を言っているのは分かってる。

要は、自分がいない間に、我が家で問題が起こって欲しくないだけ。

私の目が届かない所で、よその家の女の子が傷付いてしまった時、私が責任を取りたくないだけ。

現在の状況は、私と健太だけの問題ではなくなってきた。

もし間違いが起きた時、周囲を巻き込んでしまうのだから。

しかし、私が苛立っていた理由はこれじゃない。

健太を友美ちゃんにとられるのが、単純に嫌だったから。

私もいい加減、子離れしないといけない。

健太は『マザコン』らしいが、私の場合は何て言うんだろう？

二、三日後の私が休みの日に、出来れば今は会いたくない春子さんが家に来た。

嫌いなわけでは勿論なくて、色々難しい問題があるから…。

「聞いたよ、美希ちゃん！彼氏が出来たんだった？」

春子さんはいきなり核心を突いてきた。

「彼氏っていうか…、友達っていうか…」

「照れなくてもいいじゃない、喜ばしい事なんだから。結婚するの？」

春子さんは、悪い人じゃない事は分かっているんだけど…。

「まだ、先の事は分かりませんよ。」

「そんなにゆつくり構えてる場合じゃ、ないんじゃないの？美希ちゃんもいい年なんだから。」

何とか話題を逸らさなければ…。

「そういえば、うちの健太が、友美ちゃんと付き合ってるとか。」

「そうらしいのよ！健太君なら大歓迎よ！うちの娘には、勿体ないくらいの男の子だから。」

私の知ってる健太は、そんなに大した男じゃないんだけど…。

「この前、二人にちよつと言い過ぎちゃったかも知れなくて…。」

春子さんは、友美ちゃんから何か聞いただろうか？

「私は、健太君も友美も信用してるから大丈夫。二人共、しっかりしてるし、ちゃんと考えて行動してると思うよ。」

「そうだといんですけど…。何かあった時、傷付くのは友美ちゃんの方だから、気になって…。」

「例え何かあっても、友美はちゃんと考えた上での行動だと思うし、健太君は逃げたりしないから大丈夫よ。」

「どうやら健太の評価は、私と他の人で、随分と差があるらしい。」

「最近は何に…。」

友美と美希さん ｾ ｻ ｲ ｴ 健太

「健ちゃんは大丈夫かも知れないけど、私は本気でテスト勉強しないと、今回はヤバイかも…。」

テストが近くなり、憂鬱そうな友美。

俺だって、羨ましがられるほど成績は良くないが、友美よりは大分マシだ。」

「ちゃんと授業を聞いてないからだよ。」

模試ならまだしも、中間や期末のテストは、授業でやった事しか出ないから、そんなに難しくはないはずだが…。

「女子高生は、色々悩みが多いの！だから、授業を聞いている場合じゃない事もあるの！」

どんな理屈だよ…。

「お前だって、中学の時は、そこそこ成績が良かっただろ。だから、真面目にやれば大丈夫だよ。」

「楽に今の高校に入れた健ちゃんと違って、私はかなり無理したから大変なんだよ！」

「だったら、自分のレベルに合った高校に行けば良かったんじゃない。」

「

俺は、今の高校が自分のレベルに合ってるから選んだわけだし。

「はあ…。健ちゃんって…。女心が分かってないなあ…。」

「どづいづ事…?」

「好きな人と、一緒の高校に行きたかったから、無理して頑張ったに決まってるでしょ!」

「…!お前って…。いつから俺の事が好きだったの?」

「知らない!」

自分の事なんだから、知らないって事はないだろ?

「じゃあさあ、今日から俺の家と一緒に勉強するか?」

「えっ…!」

「俺が教えてやれる事もあるだろうし。」

「今日…。美希さんは家にいるの?」

「イヤ、仕事だけど?何で?」

「…。」

友美は、顔を赤くして俯いてしまった。

「分からない所があったら、遠慮なく聞けよ。」

「うん…、分かった…。」

どこか様子がおかしい友美だったが、俺の家には付いて来た。

しばらく無言で勉強していたが、俺は友美の様子が気になり、彼女の方を見てみる。

様子がおかしくなったのはどうしてだ？

そう言えば、この家で二人きりになるのは、初めてじゃないか？

小さい頃、俺の家で遊ぶ時は必ず美希さんがいたし。

大きくなってからは、どちらかと言えば、俺より美希さんに会いに来ている感じだったし。

そのまま友美を見ていると、彼女が不意に顔上げた。

目が合ってしまった、慌てて逸らす。

一瞬、見えた友美の顔は、ほんのり赤かった。

顔が赤いのは、熱があるからじゃないのか？

彼女が心配で、勉強に集中出来ない。

「ねえ、健ちゃん…。」

突然、友美が声を掛けてくる。

「分からない所があったのか？」

何故か恥ずかしかった俺は、顔を上げずに応える。

「…。健ちゃんは…、キスした事ある？」

「ばっ、あるわけないだろ！」

衝撃的な友美の発言に、慌てて顔を上げる。

「そつだよね…。」

そう呟いた友美が、今度は視線を逸らす。

「お前は…、あるのか？」

「あるわけないでしょ！健ちゃんが初めての彼氏なんだから。」

「そつか…。」

思春期の男にとって、衝撃的な会話だった…。

ドキドキが納まらない…。

「ねえ…、キス…しようか…。」

「は、えっ!」

今日の友美はやっぱり変だ!

本当に熱があるんじゃないのか?

「隣…、行つていい…?」

「…。」

どうしていいか分からない俺は、『いいよ』とも『いやだ』とも言わなかったが、友美はお構い無く俺の隣に座り直す。

そして、俺を見つめる。

俺が友美の方を見ると…。

彼女は…、そっと目を閉じた…。

そして、友美は元の位置に戻る。

顔は真っ赤だった…。

恐らく、俺も…。

「これ以上は…、今はまだダメだからね…。」

「…！」

『これ以上』って何ですか!?

「今日、うちでご飯…、食べていけよ。」

あれから、どれくらい時間が経っただろう?

辺りはすっかり暗くなっていた。

「いいの…? 健ちゃんが作るの?」

「当たり前だろ!」

「健ちゃんと結婚する人が羨ましいな…。旦那さんが、ご飯を作ってくれるんだから…。」

「結婚したら、友美も作れよ!」

「…！」

ん?

友美はまた、顔を赤くした。

昨日の夜から、美希さんに言われた事をずっと考えている。

昨日に限って言えば、俺には下心が全くなかった…はず…。

しかし、よく考えれば、俺の行動は軽率だったかも知れない。

万が一の時は…、俺より友美の方が傷が深いわけだから…。

友美の様子がおかしかったのは、その所為かも知れない。

それにしても、あんな美希さんは初めて見た。

いつもボヤツとしている美希さんの、あんな表情は初めてだった。

余計な心配ばかり掛けている俺は、まだまだ子供なんだな…。

「坂下！お母さんは元気になったか？」

この日の朝、武田先生が声を掛けてきた。

「もう大丈夫ですよ。あれから、何日経ったと思ってるんですか！」
「そりゃそうだ。」

この先生は、今までの先生とはどこか違う。

真面目に先生をしているようには見えないが、生徒達からは慕われているし、授業も分かりやすく面白。

毎朝、校内をフラフラしながら、あちこちで生徒に声を掛けている変わった先生だ。

「先生は結婚しているんですね？」

「うちの奥さん、綺麗だぞ！写真見るか？確か、娘と一緒に写っているのがあったと思ったけど…。」

「写真はいいです…。奥さんとは、どこで知り合ったんですか？」

「三歳頃、近所の公園で…。だけど？」

「幼なじみなんですね。」

「うーん、まあそんなところ。付き合い始めたのは、高校生になってからだけ。」

「へーえ、そうなんですか。」

「あっ、お前は竹内と付き合ってるんだろ？確か、お前達も幼なじみだろ？」

「まあ、そうですね…。何で先生が、そんな事まで知ってるんですか？」

「先生の情報網を甘く見るなよ！それで…。お前達に言っておきたい事があるんだが…。」

「何ですか？」

「高校生なんだから、異性に興味があるだろうし、恋人を作るのも構わない。先生も人のこと言えないし…。」

「…？」

「ただし、お前達はまだ子供だ。でも、体つきは大人とほとんど変わりが無い。だから、色々よく考えて行動しろよ。特に、男のお前は。何かあった時、傷付くのは竹内の方なんだからな。」

「昨日…。母親にも同じ事を言われました…。」

「それなら、先生が言うまでも無かったな。お前のお母さんは、若いのにしっかりしてるな。まだ、先生と同じぐらいだろ？」

「危なっかしい人ですけどね…。」

よく考えて行動しろ…。

傷付くのは友美…。

高校生になった俺達は、今までと同じ感覚じゃ駄目なんだな…。

ましてや、恋人同士になったんだから。

恋人は、幼なじみの延長じゃない。

もっと友美の事を考えてあげないと…。

友美とも、少し話をしてみないといけないかも知れないな…。

でも…、キスぐらいだったらしてもいいのかな？

ていうか、もうしちゃったし…。

プロポーズ ～side美希～

「私の心配し過ぎかなあ？」

あれから孝平君とは、よくデートらしきものをしている。

この日は、健太と友美ちゃんの事を愚痴ってしまった。

「僕は、彼等が軽率な行動に出るようには、見えませんでしたよ。」
孝平君も、春子さんと同意見のようだ。

「しかも…、友美ちゃんに嫉妬してる自分も嫌になっちゃって…。」

「やっぱり、美希さん達は『母親』と『息子』ですね。」

彼はそう言って笑っていた。

あれからも、私と孝平君の関係に大きな変化はない。

変わった事と言えば、『坂下さん』から『美希さん』に変わったぐらい。

私がそう呼ぶように言ったんだけど…。

私は孝平君を束縛するつもりはない。

彼はまだ若いし、気が変わる事もあるかも知れない。

その時、私自身の傷が最小限で済むように、予防線を張っているだけかも知れない。

しかし、もう手遅れのような気もするが…。

「今日は、美希さんに伝えたい事があって…。」

「…！」

突然、真剣な表情になった孝平君を見て、私は少し身構える。

「僕はまだ学生で、美希さんには戯言に聞こえるかも知れないんですが…。」

「…。」

彼が私に伝えたいのは、私にとって、良い事なのか、悪い事なのか…。

「僕は美希さんの事が好きです。これは決して軽い気持ちじゃありません。」

「…。」

「歳の差や健太君の事は、僕の気持ちの障害じゃありません。」

「…。」

「美希さんとの結婚も視野に入れてます。勿論、今すぐにじゃないですけど…、それぐらい真剣だという意味です。」

「…。」

「それを踏まえた上で、以前、僕が言った事に対する美希さんの答えを聞かせて下さい。答えが出るまで待ってますから。」

私のズルい考えは、逆に孝平君を束縛してしまっているのかも知れない。

そろそろ、私の態度をはっきりさせる時期が、来たのかも知れない。

「その返事なんだけど…、今してもいい…?」

「は、はい!」

彼も身構えた。

「私はどこか抜けているところがあって、危なっかしい人間なんだけど…。健太にもよく言われてて…。」

「…。」

「まだ手のかかる大きな息子もいて…。今はまだ、健太が何よりも最優先で…。でも、健太が大人になれば、ある程度、自分の時間が

持てると思っただけ…。」

「…。」

「その時、私は将来もほとんど見えてきていると思うの。でも、孝平君はその時、まだ可能性は広がっている状態だと思う…。その時になっても今の気持ちに変わりがなければ…、私と結婚して下さい！」

「は、はい！」

「でも…、それまでに、孝平君の気持ちに変化が生まれたら、隠さず私に言って欲しい。私の所為で、将来有望な若者の可能性を潰したくないから。」

「分かりました。でも、今は自分もちょっと舞い上がっているだけかも知れませんが、僕の気持ちは変わらないですよ。」

私は、もう結婚する事はないと思っていた。

健太が立派に育ってくれば、それで私の人生は充分満足だと思っていた。

でも…、健太が私の下を離れた後…。

その淋しさを埋めてくれる人が欲しい。

こんな私の考えは、欲張りなんだろうか？

プロポーズ ～side健太～

テストが終わった後の休みの日、俺は友美と遊園地に来た。

『初デート』ってやつだ。

「お前、今回のテスト、どうだった？」

「…！だから…、女子高生は、色々悩みが多いつて言ったでしょ！」

つまり、出来なかったという事ですね…。

「せつかく教えてやったのに。」

「健ちゃんがあんな事…、するからでしょ…。」

「ちょっと待てよ！俺の所為か？それに…、お前が言い出した事…
だろ…。」

「…。」

そう言っつて、友美は拗ねてしまった。

「そう言えば、美希さんが…。」

「美希さんがどうしたの？」

「今日は、『また美希さんの事』って言わないのかよ。」

「もういいの！諦めたから。」

諦めたって…。

「美希さんが孝平さんと、結婚を前提に付き合う事にしたらしい…。」

「本当に！良かったじゃない…、って健ちゃんは複雑なんだよね…。」

「確かに複雑な気持ちだけど、美希さんが結婚出来れば、俺は嬉しいよ。それまでに、美希さんが孝平さんに捨てられなければいいけどな。」

「大丈夫だよ、絶対。」

「でも、美希さんは結構おばさんだからね…。」

「孝平さんは、美希さんの外見とか年齢なんかは、気にしていないんじゃないかなあ。」

確かに、俺にもそう言ってたけど…。

「もし孝平さんに捨てられたら、美希さんは一生独身だな…、きつと。」

「万が一そうなくても、美希さんなら、すぐに次が見つかるよ。だって凄い綺麗な人だもん。」

「…。俺はそろそろ『マザコン』を卒業しないと…。」

「無理でしょ。」

「…！断言するなよ…。」

「無理というか…、別に『マザコン』を卒業しなくても大丈夫だよ。」

「どっぴいっ事？」

「私は、母親思いの健ちゃんが好きなんだから。」

母親思いつて言うのかなあ…、俺の場合。

「この前、美希さんが言ってた事だけど…。」

俺は、友美との今後について、話さなければいけないと思っていた。

「この前の美希さん、いつもと違ってたよね…。私、あんな美希さん、初めて見た…。」

「あの日に限って言えば、俺は本当に、下心は無かったんだよ…。」

「分かってるよ。私、健ちゃんの事、信じてるもん…。だから、付いて行っただから…。」

「でもさあ…、変な空気になっただろ？」

「まあね…。」

「これから先も付き合っていると、『その先も』って事になるかも知れないだろ？」

「その先はまだ…。心の準備が必要っていうか…。」

「例えばの話だよ！俺はとにかく、友美を大事にしたいんだ…。傷付けたくないっていうか…。」

「健ちゃんって…、やっぱり優しいね…。」

「優しいくなんかねえよ。俺だって男だから、そういう事に興味あるし…。その場の空気で、押さえが効かない事もあるかも知れないから…。」

「…。」

「でも、俺だけが満足しても意味が無いんだよ。だから、友美が『もう大丈夫』ってなるまで待つから…。あんまり、自信ないけど…。」

「

「『自信がない』じゃダメじゃん！でも…、待つのはそんなに長い間じゃない…と思うよ。』」

「どれくらい…かな？」

「教えてあげない！私がいいって言つまで待つんでしょ？」

「…。キスぐらいはしても…いいのかな？」

「したいの…？」

「うん…。」

俺達は、二度目のキスをした。

「…。キスすると…、幸せな気持ちになるね…。」

「そうだな…。」

俺は、友美を誰にも渡したくない気持ちにもなる。

「健ちゃんは、高校卒業したらどうするの？」

「まだちょっと迷ってるけど…、大学には行こうかなと思ってる。」

「それじゃあ、美希さんもまだまだ大変だね。」

「そうなんだけど…。でも、最近、やりたい事が何となく見つかったから…。それには、大学には行っとかないとダメだから。」

「やりたい事って何？」

「今はまだ、教えられない。これから変わるかも知れないし。」

「ふーん。」

「お前は？」

「私の夢は…、お嫁さん…というか、美希さんみたいなお母さんになりたい…。」

「何だそれ！子供みたいだな。」

それに、目標にする人を間違ってるだろ！

「うるさい！だから、短大か専門学校に行つて、花嫁修業をするみたいな感じ。旦那さんより、料理とかが下手だと恥ずかしから…。」

「俺より上手くなれるのか？」

「将来の旦那さんは、健ちゃんとは限らないから大丈夫！」

「えっ…。」

「…。」

友美が、俺じゃない誰かと結婚するなんて…。

考えた事なかった…、考えたくなかった…。

「俺達はさあ…、まだ子供で、将来、どうなるか分からないけど…。」

友美を誰にも渡したくなくて、ただ必死だった。

「…？」

「俺は友美と結婚したい！イヤ、俺と結婚して下さい！」

「…！」

「ダメ…かな？」

「ダメじゃない…。私も健ちゃんと結婚したい…けど。」

「勿論、これから俺達はどうか分からないけど、俺はこれから先、友美以外の子を好きになる事はあり得ない…から…。」

「多分…、私も…。」

「『多分』って何だよ！」

「私も健ちゃん以外、好きになる事はない！これでいい？」

「…。」

勢いに任せて、プロポーズしてしまった…。

大人になった俺の横には、友美にいて欲しい。

俺の事を理解してくれる女の方は、美希さん以外では友美だけしかないから。

あれから私達は ｛ s i d e 美希 ｝

私と孝平君は、健太の高校卒業を機に結婚した。

孝平君は、こんな私のどこが良かったのだろうか？

一番不安だった、私の複雑な家庭事情は、結婚の障害にはならなかった。

健太を連れて、孝平君の家に挨拶に行った時、健太を見た義父母は、流石に少し驚いていたが、反対はされなかった。

健太の祖父母は、私の結婚を、自分の娘の事のように喜んでくれた。

結婚した私は、有馬美希となったが、健太は坂下健太のまま。

健太はどちらでも良かったみたいだが、私が『坂下の姓』を名乗らせたかった。

健太は大学に進学し、この家を出ようとしたが、私はそれを引き留める。

両親が残してくれたこの家は、兄が引き継ぎ、本来、健太に引き継がれるべき家。

健太の後見人みたいな存在の私は、彼を養育する為に、この家を必要な期間だけ借りていたに過ぎない。

健太が成人すれば、返すのが筋だ。

ましてや、私は有馬美希となったのだから…。

…というのは、表向きの理由。

私が、健太と離れたくなかったのが本音。

結婚の翌年には、私と孝平君の間にも、息子が生まれる。

健太の『弟』、優太だ。

正真正銘、母親となった私だったが…。

健太は、優太の面倒をよく見てくれた。

私は産休をもらった後、仕事に復帰した為、健太には本当に助けられた。

子育ての経験があるから大丈夫だと思っていたが、健太を引き取ったのは、彼が六歳の頃だった事を忘れていた。

私は、六歳未満の子供を育てるのは初めてで、四苦八苦した。

そんな私達親子は、このまま、ずっと一緒にいるものだと思っていた…。

健太と友美ちゃんは、大学生になっても、変わらず恋人同士だった。友美ちゃんは短大に行き、花嫁修業をしたらしい。

私みたいなお母さんになりたい、と言っている。

私の真似をしたら、運がよくないと、子供はちゃんと育たないと思うのだが…。

健太は教員採用試験に受かり、高校の先生になる。

そして…。

健太が、学校の先生になってしばらく経った頃、彼等に話があると
言われる。

直感的に、二人は結婚するんだな、と思った。

知らない女の子と結婚するわけじゃないし、彼等が学生の頃から、
将来、二人が結婚する事は容易に想像出来ていたから、淋しくは無
かった。

来るべき日の為に、心の準備もしていたから…。

しかし、彼等の話は、私の想像と少し違っていた。

結婚という事に関しては、想像通りだったが、家を出て二人で暮らすと言い出した。

私は、最もな理由を並べて彼等を引き留め、一緒に住もうと言ったが、今回、健太は引かなかった。

『この家は健太のもの』という切り札は、

「しばらく、美希さん達に貸しておいてやるよ。」

と言って、取り合って貰えなかった。

「大学生になった時は、金銭的な理由もあつたから諦めたけど、今は、自分達の稼ぎでやっていけるようになったから。」

私にはこれ以上、彼等を引き留める術が無かつた…。

もし、孝平君も優太もいなかったら、私は淋しさからどうにかなつてしまつていただろう。

逆に、私が結婚していなければ、健太は家を出て行かなかつたかも知れない。

いずれにしても、私の心には、大きな穴がぼつかりと開いてしまつた。

健太には、私が必要だつたのではなく、私自身に健太が必要だつた事によつやく気付く。

この時、初めて、自分の境遇に涙した。

健太が、私の『息子』になって、はや二十年が経つ。

早くに両親を失うという、似たような境遇を持つ私と健太。

実の親子ではない私達。

しかし、健太は私の『息子』であり、六歳になる優太の『兄』である。

私にはもうすぐ、もう一人、子供が生まれるが、私の最初の子供は健太である。

実家を出た後も、度々、友美ちゃんを連れて、顔を見せに来る健太。

今日も、もうすぐやって来る。

何やら報告があるらしいが…。

子供でも出来たか？

もしそうなら、私の『三人目』の子供は、私の『孫』と同じ歳になる。

私は昔を思い出しながら、長男の帰宅を待ちわびている。

これから俺達は ｾ ｻ ｲ ｴ 健太 ｾ （最終話）

今日は、俺と友美のそれぞれの親に報告がある。

既に、友美の両親には報告し、俺は一足先に自分の実家に向かう。

五分と掛からない距離を歩きながら、美希さんの反応を想像し、
人、ほくそ笑んでいた。

「ただいま。」

「おかえり！あれ、友美ちゃんは？」

「まだ、向こうの実家にいるよ。」

「なーんだ…。」

「何だよ、その反応は！俺より友美に会う方が嬉しいのかよ！」

「勿論！」

「ぐ…。」

「まあ、いいや。取り敢えず上がりなさいよ。」

「孝平さんは？」

「孝ちゃんは、ちょっと用事があったて出てる。もうすぐ、帰ってくると思うけど。」

「プツ、『孝ちゃん』だって！いい年して。」

「別にいいでしょ！自分の旦那をどう呼ぼうが！」

「あれ？優太もいねえじゃん。」

「優太は、『彼女』の家に遊びに行ってる。」

「はあ？『彼女』って…。アイツ、いくつだよ！」

「六歳になったところ。優太の彼女、凄く可愛いんだよ！真奈美ちゃんって言うんだけど、お人形さんみたいなの。」

「ふーん。」

「優太は、誰かさんと違って、そういう方面は得意みたい。」

「『誰かさん』って、誰の事だよ！」

「一人の女の子を落とすのに、四苦八苦していた誰かさん！」

「俺は別に、四苦八苦してねえし。」

「誰も健太の事だとは、言ってないでしょ。」

「…。」

憎まれ口を叩く美希さんと、俺の関係は、昔と何ら変わりが無い。

「そう言えば、二人目の予定日いつだったけ？」

「あと二ヶ月ぐらい。今度は女の子みたいだよ。それから、二人目じゃなくて三人目。」

「俺も…、数に入ってる…のか？」

「当たり前でしょ！」

「そうか…。」

「そつだよ…。」

俺も、美希さんの子供なのか…。

「優太も、もう六歳か…。」

「あの時の健太と同じ歳…。」

「早いな…。」

「二十年なんて、あっという間だよ…。」

「美希さんは、いくつになっただっけ？」

「さあ？いくつだったかな？三十歳から、数えるのは止めたから。」

「もう四十を超えてるだろ！あれから、二十年も経ってるんだから。」

「女の人に、歳を聞くもんじゃないって、いつも言ってるでしょ！」

「いつまでも若いつもりでいる美希さんに、今日は悲しいお知らせがあるんだけど…。」

「…？」

「美希さんは、もうすぐ、おばあちゃんになるみたいだよ…。」

「それって…。」

「友美も、三ヶ月目だって。」

「やっぱり、『報告』ってそれだったか…。おめでとう。」

「そういう事だから。これからも宜しく頼むよ、おばあちゃん。」

「絶対に、『おばあちゃん』なんて呼ばせないから！あんた達みたいに、『美希さん』って呼ばせようかな？」

「優太は、『お母さん』って呼ぶんじゃないの？」

「最初はそうだったけど、今は、『美希さん』って呼ぶよ！」

「そう呼ばせてんのか？」

「あんたが、二十年もそうやって呼んでたから、その方がしっくりくるの！」

「まったく…、俺のお母さんは…。」

「…！今…、『お母さん』って言った？」

「言ってるねえよ！」

「健太に、初めて『お母さん』って呼ばれちゃった！」

「だから言ってるねえって！」

俺は無意識に、『お母さん』と呼んでしまったようだが、何故か、美希さんは嬉しそうだった。

「ねえ、健太。」

「何だよ。」

「あんた達、この家に住みなよ…。」

「はあ？流石に七人で住むには、この家じゃ、ちょっと狭いだろ？いくら乳児が二人含まれているとはいえ。」

「そうじゃなくて、あなた達が…。友美ちゃんと、生まれてくる子と、三人で…。」

「美希さん達は…、どうするんだよ…。」

「実は今度、孝ちゃんが独立して、自分の店を出すんだけど。そこを、店舗兼住居にしようって話してて…。」

「そうだったのか…。もしかして、孝平さんの今日の用事ってそれが関係あるの?」

「うん…。」

「でも、本当にいいのかなあ…。俺達がこの家を貰っちゃっても…。」

「いいも悪いも、この家は健太のものだから、何も問題ないよ。前にも言ったように、私は必要な期間、借りてただけ。その期間は、とっくに終わってるんだから…。」

「俺…、いつも美希さんにもらってたばっかで、何も返せてないな…。」

「『いつも』って、他にも何かあげた事あった?」

「そういう事じゃなくて…。ここまで育ててもらった恩とか…。」

「それは、健太がちゃんと大人になってくれた事で、もう返してもらった…。」

「でも…。」

「それに健太には、今まで、色々助けてもらったし…。ありがとね…。」

「俺の方こそ…、本当にありがとう…。」

「…。」

俺は、涙を堪えるのに必死だった。

美希さんは、俺に見られないように、顔を背けている。

多分、泣いてるんじゃないかなあ…。

「こんにちは！美希さん！健ちゃん！いる？」

俺の奥さんになったはずの友美が、子供の頃のように我が家にやって来た。

美希さんと俺が育った、この家に…。

「いらっしやい、友美ちゃん！聞いたよー、お母さんになるんだって？おめでとー！」

「ありがとっございます！美希さんも、おばあちゃんですよ！」

「大丈夫！『おばあちゃん』とは、呼ばせないから！」

また言ってるよ、あの人…。

何が『大丈夫』なんだか…。

完

これから俺達は ｾ ｻ ｲ ｴ 健太 ｾ （最終話）（後書き）

これで、本編終了です。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

番外編もあるので、そちらも、お読みいただければ幸いです。

この物語は、親子愛の話で、それに、恋愛要素を付け足した物語です。

上手く繋がられていないかも知れませんが、皆様のご意見、ご感想をお待ち致しております。

【人物紹介】

『有馬美希（旧姓 坂下美希）』

この物語の主人公。

誰もが振り返る程の美人で、実際の年齢より若く見える。

かなり不幸な境遇だが、それを感じさせない、明るく、前向きな女性。

どこか抜けているところがあり、子供の教育は、結構いい加減。

ただし、肝心なところは押さえているので、結果オーライになる事が多い。

健太の親という自覚はあり、彼にもそう思われたいが、母親とかわれるのは恥ずかしい。

『坂下健太』

もう一人の主人公。

美希の養子で、血縁上は甥に当たる。

中々のイケメンな上に、大人びているので、美希とは逆に、実際の年齢より上に見られがち。

いわゆるマザコンで、本人にもその自覚はある。

無愛想だが、根は優しく家事万能。

美希を反面教師にして、かなりしっかりしている。

ずっと友美が好きだったが、恋愛方面は積極的ではない為、その気持ちは隠している…つもりだった。

『坂下友美（旧姓 竹内友美）』

健太の小学校からの幼なじみで、ずっと彼が好きだった。

健太と両想いである事は、かなり前から気付いていた。

健太のマザコンぶりに呆れ気味。

何事も美希が最優先の健太に苛立ち気味で、もっと自分の事を見て欲しいと思っているが、そんな彼が好きというジレンマに悩まされる。

可愛らしい容姿だが、健太が好きなのは、健太以外の誰の目にも明らかなので、異性が言い寄って来る事はあまりなかった。

しっかりしていて、はっきり物を言うが、考え方は意外に乙女チック。

美希の事は、女性として尊敬しているが、ライバル心もある。

『有馬孝平』

毎朝、電車で見掛ける美希に憧れていたが、ある出来事をきっかけに、彼女と親しくなる。

かなりのイケメンで、ナイスガイ。

細かい事は気にせず、物事を内面から見る力に長けており、美希の危うさにも気付いていた。

恋愛方面は積極的で、それは息子の優太にも受け継がれている。

主要キャラ四人の中では、一番、影が薄くなってしまった…。

『武田和志』

健太の高校時代の恩師。

健太の進路に、大きな影響を与えたと思われる。

既婚で、娘が一人いる。

ちなみに、【少女Aと僕の日常】の主人公。

詳しくは、【少女Aと僕の日常】をご覧ください。

『有馬優太』

孝平と美希の実子。

六歳にして真奈美という恋人？がいる。

父親同様、恋愛方面は積極的。

【ハル、ナツ、アキ、フユ】の最終話に出てくる、『ユウ君』とは彼の事。

『竹内春子』

友美の母親。

お節介なのが玉にキズだが、美希の良き相談相手。

美希と健太を非常に気に掛けており、昔から、健太が自分の娘と結婚してくれないかな？と思っていた模様。

美希の兄とは、古くからの知り合い。

『木村（下の名前は不詳）』

美希が働いている美容室の店長。

既婚。

少し調子がいい。

美希は、孝平の独立話が持ち上がったのをきっかけに、退職した。

私と義母 ｝ s i d e 友美 ｝
（番外編）（前書き）

友美目線の番外編です。

私と義母 〈side 友美〉 (番外編)

私の夫は、はつきり言って『マザコン』である。

しかし私は、そんな彼が好きで仕方がない。

子供の頃からずっと…。

夫を好きになっただきっかけは、傍から見れば、おかしな話かも知れない。

小学校の入学式の日、私は『彼の母親』に一目惚れしたからだ。

『一目惚れ』という言い方は、ちょっと違うかも知れないが…。

他のお母さん達よりもかなり若く、とても綺麗な人だった。

この時はまだ、近所に住んでる事は知らない。

男の子と仲良く手を繋いで帰るその若いお母さんが、気になって仕方なかった私。

家に帰り、自分の母に彼女達の事を聞いてみると、母の古くからの知り合いで、近所に住んでいる事を聞かされた。

色々複雑な事情があるらしいが、『複雑な事情』とやらは、当時の私には理解出来なかった。

何とかして、その『綺麗なお母さん』と仲良くなりたい私は、その息子と仲良くする事から始める。

それが、夫との出会い。

その当時の夫は、何だか愛想がよくない子供だった。

周りに壁を作っているわけではないが、笑顔が少なく、友達も少ない子供だった。

入学式の帰りは、母親と笑顔で会話していたはずなのに…。

彼の母親と仲良くなりたい私は、一緒懸命、彼に話し掛け、仲良くなるうとする。

そんな私の努力は実を結び、彼とは仲良くなれたし、彼の母親とも仲良くなれた。

当時の私は、恋愛感情はまだ理解出来ていなかったはずだが、彼と一緒にいる事が徐々に楽しくなっていく。

いつの間にか、目的が、母親の方から息子の方へ変わっていった。

遠足で水族館に行った時の事。

水槽をずっと眺めていた彼は、みんなに置いて行かれそうになる。

彼を気に掛けていた私は、それに気付き、慌てて彼の手を取り、みんなのところ引っ張って行く。

後から、何に見惚れていたのか聞いてみると、一頭だけで泳いでいたイルカが可哀想だったと言う。

その言葉の真意を知るのは、もう少し後になってから…。

それから私と彼は、いつも一緒にいるようになる。

少し大きくなると、自分の中の恋心にも気付く。

いつも一緒にいる私達を、囂し立てる子もいたが、彼はそんな事を全く気にしない。

男女の違いを理解し始め、クラスの男女間がギクシャクし始めても、彼はいつも一緒にいてくれた。

偶然を装い、一緒に下校しようとする私に、嫌な顔、一つしない。

そんな彼に、ますます惹かれていく。

この頃には、恐らく彼も、私の事が好きだったはず。

そして、成長した私は、彼の複雑な家庭事情や、どこか淋しげな様子の理由を理解する。

中学生になる頃、私の気持ちは後戻り出来ないところまで来ていた。

同時に、彼がマザコン気味である事にも気付く。

彼の母親は、外見からはあまり想像出来ないが、いつもどこか抜けている。

彼は、そんな母親が心配で仕方がないらしく、いつも気に掛けてばかりいた。

彼の最優先は、いつも母親。

彼が考え事をしてる時は、いつも母親の事を考えている。

そんな彼に苛立ち、『マザコン野郎!』と思ったりもしたが、母親の事を常に心配している優しい彼が好きな私。

そんなジレンマから抜け出せない、この頃の私。

自分から告白しようとしたが、母親を理由に断られるのが怖かった。

高校生になる頃には、私の苛立ちはピークだった。

自分から動く事も出来ず、八方塞がりだったこの頃、私に出来る事は、彼の傍にいる事だけだった。

彼に言い寄る、他の子達への牽制の意味を込めて…。

私は、自分の気持ちを特に隠していなかったが、彼は相変わらず気付いてくれない。

気付いていたのかも知れないが、彼にとっての私は、最優先事項では無かったから…。

そんな彼は、自分の気持ちを必死に隠しているようだったが、そんな彼の態度が、私には可笑しく思えた。

だって、当の本人である私ですら気付いているのだから。

何事も母親が最優先だった彼だが、母親に男性の影がチラつき始めると、微妙に変化を見せ始める。

母親の為を思い、応援してあげようという気持ちと、母親を取られたくないという気持ちの間で揺れ動く彼。

彼はずっと、母親が独身のままなのは、自分の所為だと思っているようだった。

同時に、母親に恋人が出来たら、自分が捨てられるかも知れないと

いう可能性も恐れていた。

そんな事、私から見れば、あるはずがないのにも関わらず。

彼等親子は、自分達の『親子の絆』に自信がない。

多分それは、今もあまり変わっていない。

傍から見れば、母親思いの息子と、息子を見守る優しい母親にしか見えないのにも関わらず。

そして、私と彼が正式に付き合うようになった頃、彼の母親にも恋人が出来、順調に行けば、結婚しそうな感じだった。

複雑な思いを抱えていた彼だが、ようやく、私の方にも振り向くようになる。

少し気が早い事も口走っていたが…。

彼の中における私は、母親の次という位置付けから、母親と同等に大事な存在に格上げされた。

私は、それで妥協する事にする。

出来れば、自分を一番にして欲しいが…。

私の夫に対する思いは、彼の母親への憧れから始まった。

そして、いつしか、彼への恋心が変わり、今では私の良き夫になった。

彼は相変わらず、母親の心配ばかりしている。

私は、それを寛大な目で見守る事が、出来るようになった。

私は、義母のような母親になりたい。

そして、自分の息子を、父親のような立派なマザコンに育てたいと思っている。

ところが、これが中々難しい。

わんぱく盛りの息子に手を焼き、ついついキツく叱ってしまつ。

こんな調子で、母親思いの優しい息子に育ってくれるだろうか？

改めて、義母に尊敬の念を抱き、マザコンに育てる秘訣などを聞いてみたいものだ。

「ねえ、和人はパパとママのどっちが好き？」

「ママの方が好き！」

即答してくれる息子。

ここまでではいいのだが…。

「じゃあ、ママとおばあちゃんはどっちが好き？」

「うーん、どっちも好きだけど…。」

この質問には、どうにも齒切れが悪い息子。

おばあちゃんは、和人を叱らないもんね…。

「こんばんは！美希さん！いる？」

「いらっしやい、友美ちゃん！和ちゃんもよく来たね！」

「おばあちゃん、こんばんは！」

「和ちゃん！『おばあちゃん』じゃないでしょ？」

「間違えた！美希さん、こんばんは！」

「和ちゃんはいいい子だねー。大好き！」

「僕も美希さんが大好き！」

「…。」

おかしい…。

どこかが、おかしい…。

何かが間違ってる気がする…。

結婚記念日の今日。

息子を義母に預け、愛する夫の元へ急ぐ私。

久しぶりに、二人きりでデートだというのに、私の心は晴れない。

お義母さん…、あなたの息子の事は、妥協してあげてるのだから、あなたの孫は、私に譲ってくれてもいいのではないですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0687p/>

ある母子の恋愛模様

2011年3月3日22時37分発行